

---

# 恋姫物語

ボーズ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫物語

### 【Zコード】

N2175M

### 【作者名】

ボーズ

### 【あらすじ】

記憶を失い、失った記憶を取り戻すために恋姫の人たちと仲良くなつりながら旅をしたりいろいろしたりで自己満ワールド全開で書いていきます。

オリキャラがでてきます。何か原作無視しそうなんで嫌な人は回れ右してください。

## プロローグ

「僕は大きくなつたら大陸で一番の武人になるんだ！」

そう叫んでいるのは5歳位の男の子。

「ならまずは、私に勝つてから言いなさいよー！」

男の子にそう言つてるのは5歳位の女の子。

二人はいつも一緒に行動し、互いに競い合いながら成長していた。

「今はまだ勝てないけどいつか絶対に勝つてみせるもん。」

男の子は泣きながら女の子に言つていた。

「泣きながら言われても恐くともないよーだ！」

女の子は笑いながら男の子に言つていた。

男の子は決心したかのように女の子に言つた。

「愛ちゃんには絶対に負けないからねー！」

## プロローグ（後書き）

テンションのみで書いたが後悔はしていないよ？

1話（前書き）

がんばりまつる

「またこの夢か・・・・・。」

「（）最近頻繁に見る夢。今の俺には全く覚えのない出来事。

「『愛』つていつたい誰なんだ？」

俺は夢に出てきていた『愛』という人物が気になってしまつ  
がない。

あの子はいつたい俺とどんな関係だったんだ？

この夢は俺の問題と関係があるのか？ 有るからこんな夢を見  
ているんだろうが・・・

考出したらきりがない位の疑問が俺の頭を駆け抜けしていく。

「まあ、いつか解るだろ！ もうひと眠りしたいが目が冴えて  
寝れないな・・・

よしーこつもよつ早いが朝練でもするかな。」

俺は、寝台から身体を起こし、日課となつてゐる朝練をして外へ向かった。

「ハア・・ハア・・・。」

日課になつてゐる朝練が今日はいつも以上にはかかる。

じついつ時は、決まって良くない事が起きている。

「今田は一体どんな厄介事が舞い込んで来るんだ?」

俺は、呟きながら今までの厄介事を思い出していた。

## 1話（後書き）

思いつかない・・・文才が欲しい・・・

話が短すぎる・・・

## 2. 話題(議論)

まじめにお願いしますー。

～回想～

ひと月前・・・

俺は、母上が頼まれたこの村の周辺を治める太守の護衛に付いて行つた。

母上は昔、かなり腕の立つ猛将だったらしい。昔勤めていた城の将だったが、

その太守がかなり最低な奴らしく、それが嫌で将を辞めてこの村まで流れてきたらしい。

俺？もちろん断つたさ！いくら鍛錬してもまだ自分の身を守る為だけの武術しか持つていない、

護衛の為の武術は、まだまだだと思つていた。正直不安だ。しかし、母上は、

「あなたの武術はもう、人を守れる位にはなっていのはず。だから大丈夫。」

「いざとなつたら私が守つてあげるから。」

と言つていたが本当はなんだらう?・

「母上。本音はいつたい何ですか?」

俺は聞いた。しかし母上は・・・

「だつて一人だと退屈でしょ?護衛の兵がいても頭が固すぎりし、一人で歩くより

お話しながらの方が退屈しないでしょ?」

つまり母上は、俺を退屈しのぎの道具として付いてこなすたのか・・・

「な、う、母上は、俺に暇だから付いて来いと言つていい訳ですかね・・・」

俺は嫌味っぽく言つてみた。そんな理由で俺は命の危機に

遭遇するのか・・・

「嘘よ。退屈つてのもあるけど本当はそろそろ護衛とかの経験をさせておきたい

からよ。もちろん危険な時は助けるから大丈夫よ。」

母上は、笑顔で答えてくれた。すると俺の中の不安はいつきに解消した。

母上はこんな事を思つて俺をこの護衛に連れて行つてくれたのか。

俺は、かなりの自信とやる気に燃えていた。だが俺のやる気とは裏腹に、

何かが襲つて来る事もなく無事に太守を送る事が出来た。

しかし、その帰り道。俺と母上は、一人で村まで帰路についていたが、どうも

母上の様子がおかしい・・・何か真剣な顔で辺りを警戒している。

いつたい何があったのか聞こえますね。

母上はいきなり走り出し、訳の解らない俺はその場で立ち去っていた。

すると突然、目の前には家ほどはある熊が俺の襲ってきた。その時母上が、

「その熊はまかしたわよーー私、熊は苦手だからーー！」

と聞こえてきた。そんな声を聞き流しつつ、俺は必死に逃げた。

俺が村に着いた時は、真上にあつた田の光が見えない位になつた時だつた・・・

その他にも猪に追いかけられたり、またあの熊に出会つたりなどしていた。

適当になつてしまひました・・・

まさかの連続投稿？

やつぱり朝練がはかどる時はひくな事が無い・・・

今田はいつたい何があるんだ?何か今田はかなり危険な感じがするし・・・

「兄上。朝練をするのはいいが、そんな格好では役人に捕まってしまいますぞ。」

ん~いつたい何なんだ?何か聞こえて来るし・・・ん~?

「兄上! ! ! ! 聞いておりますか?」

ん?痛だつ! ?何者かによつて俺は現実に引き戻されると同時に、首を思いつきり捻られました。

「何だ。星じゃないか! こんなに朝早くじうした?一緒に朝練するか?」

「どうやら星が俺と朝練したくて起きてきたようだ。よし相手

になるか！

「兄上……朝練ではないであろう……もうすぐ食ですぞ？」

今、星は何と叫つた？食だと？俺はこつたござれほどの時間鍛練していたんだ？

「鍛練よりも考へている時間が長かつたと思ひますが？」

そつなのか？かなり無駄な時間を過いしたな……

「そろそろ食なら飯でも食べるか！星へ行くぞー！」

俺は、星と一緒に食を食べに家中に入つて行つた。

家の中はすでに食の良い匂いがしてゐた。ちょうど腹も空いてゐるしな！

「母上、父上。兄上を連れてまいりました。外に裸でいる所を捕まえました。」

星がなにか言つてゐるが『仮にしなこでね』……

「おつ来たかー早く食べやモー。」

父上が食の命令をかけ、昼食（朝飯）を食べ始めた我が家族。  
「やつといえ、お前が我が家に来て5年も経つのか……早いものだ。

最初は星に嫌われていたのに今となつては「こんなに懷いて……

こつたがあつたんだやつな。」

やつこえ、父上の言つ通りに来てもう5年か……

そうこえ、父上は星にやたらと嫌われていたな。まあ今も  
あ今となつては良い出だ。

「あの頃のお前もかなりの問題を抱えておつたな、まあ今も  
その問題は解決してないがな。」

父上の言つとおり、俺の重大な問題も解決しないまま5年  
経つてゐるしな・・・

そろそろ、どうにかしないとな・・・それにしても5年  
前は大変だったな・・・

星ちゃん登場！

それにして口調が良く解らない・・・

あります

「5年前」

「うう・・・・・・」

目を覚ました時、見えて来たのは、どこかの天井。びつやら寝ていたらしい。

「気がついたかい？」

声をかけられた方に目を向けると、知らないおじさんが僕の顔を覗きこんでいた。

「あの・・・」

「あの・・・」

僕は今、自分がどこに居るのか解らないため、おじさんに聞いてみた。

「ここは私の家だよ。君がここから少し離れた川で倒れている

のを見つけて、ここまで

運んで寝かしていたんだよ。いったい何があつたんだい?』

おじさんは優しく答えてくれた。僕は、川で倒れていた所をおじさんが助けてくれたらしい。

えっ・・・!僕は何故、川で倒れていたのだろう・・・?

何故おじさんに助けてもらっているの?

なこより

・・・・・

僕はいつたい誰なんだ？？？何も思い出せない・・・

全く思い出せない・・・やつも今まで見ていた夢より前の出来事は

何ひとつも覚えていない。僕は誰で、何故ここにいるのか？

何故川で倒れていたのか？考えるほど頭が痛くなる・・・

まるで頭が何も思い出すなと言つてこるかのようである  
ほど痛くなる。

「ハア・・・ハア・・・」

それと同時に呼吸も荒くなつていぐ。

「君ーだ・・・じょ・・・ぶか?」

おじさん何か言つてこようつだが何も聞こえない・・・

そして僕の意識は闇に呑まれていった・・・

「気がついたかい？」

僕を助けてくれたおじさんが心配そうに見つめていた。

「どうやらまた気を失つていたらしく……

「さつきはかなり苦しめられたけど大丈夫かな？無理に話をしないでいいからね。」

25

おじさんの畠は本当にやさしい。少しだけ気持が落ち着いた  
気がした。

今なら話せそうな気がする。

「おじさん。僕を川で助けたって言つてましたけど、僕はそれ  
までの事を、

全く覚えていないんです……自分の名前も……夢を見た  
ことしか覚えてなくて……」

僕は、全てを話した。

「そればどろくな夢なんだい?」

おじちゃんが聞こひきたのや答へる事にした。

ぐたぐた・・・文才をください・・・

がんばります

～夢の中～

「……は・・・？」

僕は、見渡す限り何もない真っ白な世界で立っていた。

「……は何処だらう？ 僕は何をしてるの？」

「ねえ！ 誰かいなの？」

僕は出せる限り叫び、誰かいいか探していた。

しかし、聞こえるのは僕自身の声のみ、不安で押しつぶされそうになつていく。

「嫌だよ……一人なんて……誰か助けてよ……こんな所に居たくないよ……」

孤独といつ恐怖、ソーシャルがゼンか解らない不安、全てが合わせつて、その場でつづくまつた。

「恐いよ・・・一人にしないで・・・」

僕は誰も居ない世界でうわ言のように同じ言葉を繰り返していく。た。

「小僧！ここにお主を連れて來たのはほの私だ！」

その時、何処からか『声』が聞こえてきた。

僕は声がした方向を向くと、真っ白な世界が急に眩しくなり思わず目をつぶつた。

しばらくして目をあけるとそこは、真黒な『黒龍』がいた。

「綺麗だ・・・」

今の状況を忘れるほど、僕は現れた黒龍に見とれていた。

「小僧！ もちろんお主をここに連れて来たのはこの私だ。」

黒龍の言葉で我に返った僕は、さっきまでの事を思い出した。

「だったら僕をここから早く出してよ。」

この黒龍が僕をここに連れて来たのなら、きっと元の世界に返してくれるはず。

僕はそう思い、黒龍にそつとけんだ。しかし、帰ってきた答えは驚く物だった。

「無理だ！ お主を今戻す事は可能だがお主は直死ぬぞ。」

僕が死ぬ？ 黒龍の言葉が理解できなかた。

「死ぬつてどうこいつ」とへ。」

思はず聞いていた。

「そのままの意味だ。お主は崖から落ち、瀕死の状態だ。  
お前に頼みたい事があつて私はお前の魂をここに連れてきた  
のだ。」

「うむ・・実はあと一〇年ほどでこの大陸が揺らぐほどの動乱  
が始まるのでな、

「の際だから聞いてみよ。」

「頼みつてなに？」

「そこでお主にこの動乱を止めてほしいと思つたのでな。  
私が行けばかなりの混乱になる、そこでお主に頼みたいと思  
いに呼んだのだ。」

なるほど・・・黒龍が言つには大陸を巻き込む動乱が始まるようだ。

「止めて欲しいって言つても、僕にそんなに凄い力なんて持つてないよ！」

僕は弱い、何も知らないただの男だ。大陸を救うなんて英雄みたいな事できるはずがない。

「心配はいらん。私の力をお主にやるつ。そして、時が来たら私の牙、

黒龍偃月刀を探してくれ。」

「でも僕はもうすぐ死ぬんじゃ？」

死ぬ人間に力を与えても何も意味がない。僕はそう思った。しかし、黒龍は。

「私の力を与えるということは、全ての力が強くなる、無論、生命力も同じだ。」

つまりお主はまだ死ない。だが武術はまだ弱い、だが鍛錬

するほど強くなる。

私を信じるんだ。」

黒龍は未来を僕に託すらしい。生きるならどんな事でもしてやるつー僕は未来を救う決意をした。

「良い目になったな。では行くぞ。龍の化身として復活するが良い！」

黒龍はそう言い残し僕の中に入つて来た。そして僕の意識は無くなつた。

ぐたぐた・・・

毎回そんな事しか言ってなくない？

風邪をひきました・・・

頭痛い・・・

でねの話題ついでねー

「どこで夢を見ました。」

僕はおじさんと夢の内容を話した。

「そりゃ・・・黒龍がそんな事を言っていたのか・・・世は乱世か、確かに今の朝廷は

腐敗してきているからな・・・」

おじさんもこの世の中の行く末が解っているようだった。

「なら君の背中にある龍の刺青はその黒龍なのかい？」

えっ！？刺青？僕は驚いた。本当に僕の中にいるなんて信じられない。

「そりゃあ君は帰る場所はあるのかい？」

おじさんの言葉で僕は、自分の状況が理解できた。

「あつ・・・記憶もないのに帰る家もあつません・・・なので、どいかで野宿などをして生きていこう」と思っています。

なのでそろそろ失礼します。助けてもらつてあひがとハハハぞります。」

僕は精いっぱいのお礼を言つて立ち去つとした。だが、おじさんは

僕の腕をつかみ、真剣な顔で歩み寄つた。

「なんなら私達の息子にならなきかい？」

僕は驚いた。見ず知らずの僕を助けただけでも感謝のしきれな  
いくらいなのに

あらうに養子になるなんて・・・

「そんなのおじさんの家族の迷惑になりますよ。」

養子だなんて・・嬉しいけどこれ以上迷惑になりたくはない。

「大丈夫だよ。君を助けたのも龍のお導きだとおもうから。

君を立派な武人に育てるのも私達の役目だとおもうから。」

おじさんの田は真つすぐ僕を見ていた。何かがこみ上げてくる。

「本当にいいのですか？」

僕は最後の確認をとる。僕はおじさんに助けられる運命だったんだ。涙がである。

「いいとも！私の名前は趙海黃龍だよ。

君の名前は・・・趙昂天龍だ！」

おじさんに名前を付けてもらつた瞬間、今まで溜めていた涙があふれてきた。

そして僕は、趙昂 天龍として生きていこうとなつた。

「では早速、家族に紹介しようか。って寝てるか・・

「今日はいろいろあつたからな。ゆっくり休みなさい。」

おじさんは僕の頭を撫でて部屋から出て行った。

僕の寝顔は安心した寝顔だったかもしれない。

やつと名前が出て来た。良かつた。

それにしても熱が引かない・・・

## 7話（前書き）

更新遅れましたすみません・・・6話目を書いた次の日、熱のせい  
かとうとう限界が来て病院に行くと即入院させられました・・・そ  
して無事に退院したので更新していきます！！！！

でわでわ7話目です！

「趙昂、起きなさい。」

僕は、おじわんの声で目を覚ました。

「おじわん、おはよー」わざわざ。

「うーん私はもうおじわんではないよ。父親だよ。」

やうだつた。僕は今日から『趙』家で暮らすんだ。

「趙昂、君を家族に紹介するから来てくれ。」

今から家族に僕を紹介するみたいだ。そういうえばおじわんの事を  
なんて呼べばいいのだろう?

「あの・・・あなたの事をどう呼べばいいですか?」

僕は、失礼だと思いながらもきいてみた。

「好きに呼びなさい。娘は私の事を父上と呼んでいるよ。」

父上か・・呼びやすそつだから僕もそつ呼ばう。でも娘がいるのかあ。

仲良くできるかな・・僕は期待と不安で部屋に入つた。

部屋の中はもう朝食の準備がしてあり良い匂いが漂つている。

机には父上の家族がそろつていた。

「昨日話したようこ、今日から我が家家の家族になる趙昂だ。ほら、何か言いなさい。」

「今日からお世話になります。趙昂 天龍です。よろしくおねがいします。」

かなり緊張した、今日から一緒に暮らす人たちだから嫌な印象は絶対に避けたい

僕は、満面の笑みでいさつをした。

「私は、趙華<sup>ちょうか</sup> 宵龍<sup>しょりゆう</sup> 真名は善<sup>よし</sup>よ。」

「今日からあ母さんだから。よろしくね。」

綺麗な人だ。こんな人が母上でいいのか？それほど美人だった。

「趙雲 子龍、真名は星よろしく」

かなり無愛想な子だな・・かなり睨んで来てるし、嫌われてるのかな・・

「ちょっと星！そんな態度しないの！お兄ちゃんなのよ。」

母上が星をなだめている。やっぱり嫌われたのかな・・僕・・

すると星が僕にとんでもない事を言い出した。

「いいですか！私はまだ兄と認めてません！なので気安く呼ばないで欲しい！」

そう言つて星は食卓から出て行った。

「、」めんね。あの子まだ緊張してゐるよ。じょじょへしたら慣れると思ひから。

そういえばあなたは何か武を持つてゐるようね。そんな気がするわ。

「

そうなのですか！？自分でも驚いた。記憶を無くす前の僕は何をしてたんだ？

「そうこうことで、明日から鍛えるからよろしくね。これから2人か。楽しみ。」

母上は、満面の笑みで言つた。その時の母上の顔は一生忘れないださうと思つた瞬間だつた。

病みあがりだから進む！暇な時考えて良かった。

病みあがりの俺には敵はイナイ

趙家に来て早半年、僕と星は母上にかなり鍛えられていた。

「ほら昂一、こじが隙だらけよ！ 星！ ここの笑きが甘い！」

鬼です・・・子供相手にこじまでするなんて・・・しかし、母上は

「今の内鍛えとかないと将来大変な事になるわよ。」

だそうです。確かに10年後は混乱が始まると黒龍も言つていた  
し。

そのおかげと龍の力で僕はどんどん力を付けた。

ちなみに、僕は真名は付けられていない、父上曰く、

「記憶を思い出した時に真名は必ず思い出す。その時に私たちに  
教えて欲しい。」

と言わされたのでそれまでは昂とうよぶやうです。

しかし片づけたい重要な問題がある。そう、妹の星との関係だ。

ここに来て半年たつたにも関わらずまだまとめて話していない・・・

話したとしても挨拶や、母上と父上の言ひにしかない、兄弟らしい会話はまだ無い。

話しかけても、気安く話しかけるなど言われる始末。ittai  
どうすれば・・・

ある日、僕と星は母上から呼ばれ、

「昂と星。今日は一人で、いつもの薬草を探つてきちゃうだい。

」

気まずい・・・いつもは母上も入れた三人で行つていたのに・・・

「母上。私一人で行つてまいります。こんなと一緒に行つても  
無駄です。」

星が一人で行くと言った。後半はものすごい響いたが・・・

「だめよーーあなた達一人で行きなさいーー！」

「はい・・・」

星は、しぶしぶ納得したようだ。

そして僕達は、薬草を探し森の中。しかし会話が全く無い。会話もない中、田代の薬草を摘み終え、帰路に就こうとしていた。

途中に通つた今にも崩れそうな吊り橋にはかなり驚いた。

この際だから星の気持を聞きたいな。僕は話しかけた。

「ねえ・・なんで僕にそんなに冷たいの？」

勇気を出して聞いた。しかし、

「別に何でもないですよ。」

あしらわれた。そう言つて星は歩きだした。僕は諦めない星の腕をつかみまた言つた。

「嘘だ。何も無いならそんなに冷たくないでしょ？」

本心から言つた。だが星は、

「私に触るな！ 何も無いと言つたら何も無い！」

そう言つて、僕の腕を振り解いて走つて行つてしまつた。

僕は立ち尽くした。ここまで嫌われていたなんともうびつじようもないのか・・・

しかし、何かを忘れてる気がする・・・・・・・・・・・・

「吊り橋だ！ 星が危ない！」

行く時に通つた吊り橋は走つて通ると必ず足場が崩れる。

そう思い全力で星を追いかけた。

星の姿が見えた時は、星がもう吊り橋に入ろうとしていた。

これじゃ必ず足場が崩れる。

「星ー止まれー！」

叫んだ。だがもう遅かった。バキッと音と共に星の身体が傾いていく。

僕は、思いつき手を伸ばした。

↓ side 星↓

「ねえ・・なんで僕にそんなに冷たいの？」

「うるさい。ただそれだけ。だから言つ

「別に何でもないですよ。」

「もうここに帰らうとするが彼に腕を握られ、

「嘘だ。何も無いならそんなに冷たくなってどうしよ？」

もうやめて。これ以上私を苦しめないで欲しい。今までの物が全て出て来た。

「私に触るな！何も無いと言ったら何も無い！」

私は腕を振り解き急いで走った。

あいつは私の気持ちを知らないで、いきなり家にやつてきて全て取られた気がした。

何処まで走ったか覚えていない。気がつけば吊り橋に差し掛かっていた。

あの橋はもう崩れそつた。走つて入れば必ず崩れる。

だが足は止まらない。

「星ー止まれ！」

後ろであいつの声がしたがもう遅い。私の足は吸い込まれるように橋に踏み入れる。

バキッと音と共に私の身体が傾く、私はもうこれまでか・・・と思いつつ、目をつぶる

しかし、落下する気配が無い。何かに引っ張られている。上を見るとあいつが手を握っていた。

↓ side out ↓

危なかつた。足場が崩れ、落ち切る寸前ぜ星の手を掴む事に成功した。

「何をしている？早く手を離せ！死ぬのは私だけで「馬鹿！」「い・・？」

「何が手を離せだ？星は僕の家族だ！そして妹なんだ！勝手に死

「ぬとか言つな！」

僕は叫んだ。妹を見殺しにする兄なんていない。嫌われてもいい

大切な妹だから絶対に助ける。僕は掴んだ手を引き上げた。

「ひつぐ・・えぐ・・

星は泣いていた。僕は泣きやむまで抱きしめていた。すると星が、

「私は・・・恐かったのです・・・あなたが来た時に父上と母上  
を・・

取られそうだと思ったのです・・・」

「そうか・・・僕が来たからか・・・

「私も最初は仲良くしようと思つてたのですが、しかし見た瞬間、

嫌だという感情が大きくなりあんな態度をとつてしましました・

・・・

私は嫌われるような事をしてきました・・・

「嫌いになんてならないよ。大事な妹だからね。」

やつと繋がつた・・兄弟として。初めて本当の家族になれた気がした。

「兄上・・・」

「あつ！初めて言つた！」

僕は嬉しくなつた。心の底から。

「じやつ帰るうか！」

と僕たちは立ちあがつた。すると星が、

「兄上・・手を繋いでもよろしいですか？」

「良いこきまつてるよ。」

僕たちは手を繋いで帰路についた。夕日が僕たちを見送りながら。

初めてこんなに長く書いたぞ。

星の口調は無視しますが・・・許してください

では次の話で

## 9 話（前書き）

この話では、里を現代中国の「里」(500m)を使います！

ではどうぞ。

～回想終了～

「懐かしいな。」

俺は、この家にお世話をなる理由を思い出し、しみじみしていた。

そういえばその時から自分の事を『俺』と書いて出したかな。

「兄上、この後なにがありますか？無ければ私と一手付き合つて  
もらいたい。」

ふむ。午後からは何も無いからな、いいだろつ。

「よしー里、午後からこつ『駄菴よー』しょん・・・？」

母上が駄菴だと言つてきた。

「午後から私と、昂はちょっと出かけて来るから次の機会にしな

るい。」

「母上……何も聞いていませんが……」

俺は、初めて聞いて、いま決まった用事は何なのか考えていた。  
熊か？

「だつて今言つたし。用事つて言つても近くを荒らしている賊の  
退治よ。」

賊だつて？この近くまでやつてきたのか？前の護衛の時は何も無  
かつたが

今回は、賊と戦闘をするという前提で俺を連れていくだと？

「母上…なら私も連れて行つてください…。」

星が行きたいと言つている。勇敢じやないか。

「駄目よ。敵はかなりの数だと聞いているから一人を守りながら  
はきついわ。」

だから星、今回は我慢してね。」

「わかりました・・・」

星はしぶしぶ納得したよつだ。

「では昌。準備をして一今から一刻後に出発よ。」

母上は張り切つて準備に食卓を後にした。

（一刻後）

俺は母上と賊が出るという場所に向かっていた。

川沿いを上り14里離れた山を田指して進んでいる。

しかし、8里過ぎたあたりから頭痛がしてきている。

母上に語り合てはいけない。俺は何もないよつ振る舞い進んでいた。すると

「実は賊の退治は嘘なのよ。本当はあなたの記憶の手掛けりがそこにいるかも

しれないから向かっているの。」

えつ・・・・? 記憶の手掛けり・・・? 僕は耳を疑った。

「母上本当ですか?」

俺は嘘か本当か解らぬい情報に驚き、母上にきいた。

「あくまで手掛けりよ。あなたを拾つたとき川で倒れていたでしょ?」

そして、あなたを見つける少し前に上流の村が壊滅しているのよ。

あなたがそこから流れで来たと想つて連れてきたの。」

といつては、そこが俺の故郷かもしれないといつてとか・・・

俺はそう想いながら口への道を急いだ。ひどくなる頭痛を抑えて・

かなり短くなりました。すみません。

「のふもとまで来た俺と母上。目的地まであと3里までところが、

俺の頭痛が耐え難いほど強くなつてゐる。まるでここに来るな  
といえどもかのよう。」

母上に語りはいけない。・・・心配をかけはいけない。・・・

しかし、いくら耐えようとしても限界があり俺はとつて倒れて  
しまつた。

母上が血相を変えて走つてするのが見える。だが目が霞んでいく。

・

母上の言葉が何も聞こえない。地面が近くなつてくる。

そして意識が無くなつた。

「くつ・・・

俺が意識を取り戻した時はもう辺りは暗くなっていた。そして今は洞窟の中だ。

「目を覚ましたのね。昂、あなた大丈夫なの？急に倒れたりして。何かあつたの？」

母上が心配の面持ちで聞いてきた。

「はい・・8里位来た辺りから頭痛がしてきて、目的地まで3里といつといひで、

耐えれなくなりました・・・」

「そうなの・・・今は大丈夫？」

多少頭痛がするが耐えれないほどではない。

「はい。今は大丈夫です。」

俺は心配ないという表情をした。

ん？何だこの感覚・・・この先に何かあるのか？

身体が勝手に立ち上がり、引き寄せられるように歩いていく。

「ちよつと…昂…何処に行くの？待ちなさい…」

母上の言葉が聞こえるが身体が前に進んでいく。

しばらく歩いて行くと、そこには祠があつた。

足はこの祠を田指しているようだった。田の前に来ると自然に足が止まる。

母上も一緒に止まり、祠の中を覗く。

その中には、真黒な刀身に、龍の頭を模りそこから刀がでている。全て黒の武器があった。

「いろんなところに凄い物があるものね、いったい誰の得物かしら？」

母上が首を捻つて考へてゐるが俺は祠に近付いた。

「黒龍偃月刀・・・」

俺はそう呟き、偃月刀を握つた。すると偃月刀の中に吸い込まれて行く感覚がした。

「小僧。起きよ。」

俺は昔聞いた声で目が覚めた。そこは、真っ白な世界であり、黒龍がいた。

「久しぶりだな。偶然とはいへ、良く我が牙を手にしたな。」

確かに・・・ここに来たのも俺が頭痛に耐えられず、母上が洞窟に運んでくれたおかげだ。

「何故俺はここに呼ばれたんだ?」

「ふむ・・・お主。偃月刀を持つてみろ。」

俺は、言われた通りに偃月刀を持ち上げようと握った。

ズシン・・・

俺は偃月刀がこれほど重い物だとは思わなかつた。

「重いだろ?」このまま我が牙を渡してもかまわんが、うまく振れないのならば持つている意味がない。この重みは想いがあれば軽くなり振れるようになる。我が牙を振るう理由を見つけてまいれ。出直してくるがいい。」

黒龍がそういうと、俺の意識は飛ばされた。

・

気づくとまた祠の前だった。偃月刀を抜こうとしてもびくともしない。

これを振る理由か……何だろう……解らない。

「母上。この得物は昔話した黒龍の牙です。そして先ほど黒龍に会って、話してきました。」

「やうなの……で、黒龍は何ていっていたの？」

母上に聞けば答えが出るかもしれない……

「母上、黒龍から、我が牙を振るう理由を見つけて来るよう言われました。

その理由とは何なのでしょう……

しかし母上から返つて来たのは違つ答えだった。

「その理由は、あなた自身で見つけなことだけない」とな。」

自分で見つける。母上がそう言つたが、やはり解らない。

「すぐには解らなくていいのよ。こつか気づく時が来るから

その時に理解しなや。そしたらあなたはもっと強くなるから。

その時にまたここに来なや。」

そんな物は見つかるのかと俺は思つていた。

「なら出発しましょ。もうすぐ目的地だから。」

母上がやうやく、俺達は歩きだした。

10話（後書き）

大丈夫かな？・・・？

## 1-1-話（おとぎ話）

10話 おとぎ話 ちいさな こどもの うた

ズキン

俺と母上は、俺の故郷だと思われる壊滅した村を目指していた。

しかし、また頭痛がしてきた。

「昂、大丈夫？」

母上が心配しているがさつきよりは楽だ。

「大丈夫です。先ほどよりは楽なので。」

母上は良かつたと言い、歩き始める。

しばらく歩くと道の脇に道があった。俺は何だか行かないといけないような気がして足をそつちに進める。

道を抜けると見開いた場所に出た。不思議な事に頭痛がしていな

い。

「どうやら産みたいね。道を間違えたようだし戻りましょ。」

母上は戻ると言いだしたが、俺は産に向かつて更に足を進めた。

ズキン！

その時、今まで一番激しい頭痛がしてきた。だが意識は失わず、保つままだつた。

同時に何かが頭の中に入つてくる。

「もう止めて下せー！」

誰かの声がしている。振り向くとそこには子供を抱えた女性と剣

を持った男性がいた。

しばらくして子供の姿が見えた。そこに居た子供は、「俺?」

子供の時の俺がいた。かなり怯えているようだ。と「う事は」この女性は俺の母親なのか?

だが肝心の顔は霞みがかかったような感じで見る事ができない。

「村人を皆殺しまでして、どうしてこんな事をするのですか?」

「この男は村人を皆殺しにして更に逃げた俺と母親?を追いかけてきたらしい。」

「知った事を・・・村人を殺したのは我が力を試したいからだ。」

本当の目的は龍の血を引く「」いつの始末だ。今すぐどけ!」

「この男の目的は俺を殺す事らしい。どうにかしたいが身体が動かない。」

「この子には指一本触れさせません!」

母親？が子供の俺の前に立つ。しかし男はそんな事も気にせず話す。

「今はただの子供・・だが血が覚醒すれば、俺の邪魔になりかねん。

邪魔するのなら貴様から殺す！」

そう言い男は母親？に斬りかかる。

助けないと。だが身体は動かない。

男の剣が母親？に迫る。だが母親？はそれを止める。

「私も少しだけ龍の血が流れているのよ。ちょっととの時間稼ぎ位出来るわ。

烈火！早く逃げなさい！」

「ふむ・・だが今の俺には到底及ぶまい！子供諸共葬りさつてくれる！」

そう言い男の剣は一人に振るったが、斬られたのは母親?だけであつた。

倒れしていく母親?子供の俺は倒れた母親?を搔きぶつけていた。

「お母さん?起きてよ・・・起きてよ・・・

子供の俺の悲痛な鳴き声が木霊した。

「す、ぐ、お、前、も、母、親、の、元、へ、送、つ、て、や、る。」。

「うああああああああああつーー。」

突然子供の俺が叫びだした。顔を上げると様子が変わっていた。目が赤くなっていたのだ。

「何故、お母さん?こんな事をしたんだああ?」

男にやつしに言ひ子供の俺は男に立ち向かつて行こうとした。

ブツン！

そんな音と共に俺が見ていた物は終わった。

現実に帰った俺はわざきの事を整理していた。

今見たのは、あの時の俺が見ていた物・・・すると今のは俺の記憶の断片・・・少しだけ思い出せたが・・・

だが解らない事も多すぎる・・・龍の血って何だ？そしてあの日・

だが一つ思い出したのは俺の真名だ。

俺の真名は烈火だつた。他にも気になるが、自分の真名を想い出

せたので良かつた。

「昂・・大丈夫なの?かなり辛そうだがこれは言つておかなくてはいけない。」

先ほどの頭痛の心配してこようがこれでは言つておかなくてはいけない。

「母上! 一つ思い出しました。俺の真名は烈火です! 烈火とお呼び下さい。」

「そりなの? 記憶が戻ったの?」

まだ全て戻つた訳ではない。ほんの一部だけだ。

「いえ、まだほんの一部にすぎません・・・ですが真名を思い出した事により

他の記憶も見つけやすくなるとおもいます。」

「なら烈火。これからあなたの村に向かうわ。覚悟してちょうだい。」

母上はやつ言い、また村を田指して進みだした。俺もそのあとを追つた。

## 1-1話（後書き）

何か無理やり感がある・・・「みんなさー

感想お待ちしております！

こんばんわ！！

がんばります！

自分の真名を思い出した俺は、母上と俺が生まれた村の跡地に進んでいた。

少し記憶が戻つたおかげか、頭痛は無くなつていた。

しかし、新たな問題も浮上してきたのだ。

【黒龍偃月刀を使う理由】だ。解らない・・・母上は何か解つているようだが教えてくれない。

「烈火。着いたわよ。」

いろいろ考えていろいろうちに、田的地まで着いたみたいだ。

その村の跡地を見渡すと、家が在つたであろう場所は、木材の破片が飛び散り、

焼かれたであろう家は焦げ跡になり、悲惨な状態であった。何軒か形を保つている所もあるが、

そこも直に崩れて行きそうだった。

許せない・・・あの男が自分の力を試したいだけに、俺の故郷を壊したと思うつと、

心の奥から、悔しさが出てきた。

「烈火、この村を見てどう思ったの？悔しいと思ったのなら、この悔しさを

在るのだから・・・「

まだこんな村が在るだと？俺は母上から聞いた話に驚いた。

それと同時に、俺の中で何かの感情が芽生えた。

「何か決意したみたいね・・・なら帰りましょうか。」

母上は、俺からの何かを感じたらしく、満足そうに帰路についた。

俺も帰ろうとしたとき、「烈火！逃げなさい！！」

母上のそんな声と共に、俺は茂みに飛ばされた。

茂みから顔を出すとそこには、300人位の賊と対峙している母上の姿があった。

母上が危ない・・・助けにいかないと・・・だが恐怖で近づけない。

「女がこんな所で何をしている？」

賊の大将らしい人がそんな事を言つている。

「そんなのは私の勝手であるつ。」

母上が殺氣を放ちながら答える。俺は見ているだけしか出来ないのか・・・？

「ここは俺達の縄張りだ。来たからには返す訳にはいかねーなあ！」

それに、良く見たらお前良い女じゃねーか！俺の女になれ！」

男がドスの聞いた声で母上に言い返す。

「断るー私がお前達みたいな者達に遅れを取るとでも思つてか？」

「寝言も休み休み言つがいいー！」

母上の言葉に腹を立てた賊の大将が青筋を立てている。

「許せねえ・・・お前らー！」の女を捕えるー！」

その掛け声と共に、他の賊たちが母上に突っ込んで行く。

「趙宵龍ー参るー！」

母上も同時に突っ込んでいった。

母上の武は凄かった。数では圧倒的に不利だがそれも関係無いかのように敵を斬つていぐ。

首が飛び、血が舞う。辺り一面は死体の山になっていた。

俺はかなりの吐き気がこみ上げて来た。俺自身は、田の前で殺し合いが行われていることが信じられなかつた。

母上は圧倒的な武で敵を片づけて行く。母上の武で、賊は逃げ出そうとしている。

「お前らー女一人に何をやつてーるー数で押せば勝てるー突っ込めー！」

大将の声に、突っ込んでいく賊たち。だが母上に圧倒される。

しかし、半分を過ぎたあたりで母上の様子が変わつた。かなり肩で息をしている。

どうにかしないと・・・だが恐怖で身体が動かない。

「女が疲れているぞー！今が好機だ攻めろー！」

また突っ込む賊たち。母上も抵抗する。だが、数には勝てず、と

「うつ隙を作ってしまい、

敵の一撃を貰い氣絶してしまつ。

「けつー手一ぱりせやがつて。お前らー帰るぞー。」

そう言い賊達は大きな建物の中に入つて行つた。

俺はその場で崩れた。母上が危険な時に何もできなかつた自分が情けなかつた。

悔しい・・・俺はこのまま家に帰るのか?嫌だ・・・母上を助けたい。

だが力も武器も無い・・・武器も無ければ母上を助けられない・・・  
武器・・・?

俺はあの祠にあつた黒龍偃月刀を思い出した。あれが在れば母上を助けられる。

そう思った俺はすぐに、祠に向かつた。

祠に着いた俺はすぐに偃月刀を握った。そして俺の意識は吸い込まれた。

「小僧！何の用だ？」

黒龍が俺に聞いてくる。

「お前の牙が欲しい！」

「何故私の牙を求める？」

俺は母上と賊の一戦を思い出しながら答える。

「俺の母上が賊に捕まつた。母上を助け、守りたい！だから俺はお前の牙を求める！」

俺は迷い無く答え、黒龍を見つめる。

「小僧！良い田になつたな。よし！私の牙を持って行くがよい！」

黒龍がそういうと偃月刀の中に入つて行つた。俺は偃月刀を持ち上げた。

すると、俺の中に、何かが入つて來た。さっきまで重かつた偃月刀が嘘のように軽い。

身体が軽い。かなり力が湧く。俺は偃月刀を担ぎ、賊達の住処に急いだ。

## 1-2話（後書き）

更新しました。

感想お待ちしています。

あと一刀も出した方がいいのか迷っています。

そのあたりもみなさんの意見を聞きたいです。

よろしくおねがいします。

助けたい。賊に捕まつた母上を何としてでも助けたい。

俺は賊の住処の前に来た。だが目の前まで来ると俺の身体は動かなくなつた。

ここに乗り込むという事は母上を助ける代わりに、賊を殺すという事、

俺に出来るのか？恐い・・・早く行かないと母上が危ない。

俺は賊の住処に入ろうと扉に手をかける。その時、

「嫌あああつー。」

母上の叫びが聞こえたと同時に俺は扉を勢いよく開けた。そこに

は、

衣服を破られ、身体に傷を作り、ボロボロになつた母上がいた。

その母上を見た俺は奥から怒りが込み上げてきた。

「お前らアアアー母上に何をしたアアア？」

俺は怒りのままに声を荒げた。

「何だあ？ガキが一体何の用だ？ここを見たからには生きて帰れると思つなよ。」

賊が言つてゐるが今の俺にはどうでもいい。

「ガキを殺せ！」

賊の大将がそう言つと他の賊が俺に向かつて來た。

俺はさつきまでの恐怖心が不思議と無かつた。在るのは母上を助けたい、ただそれだけ。

一人の賊が俺に剣を振り落としてくる。俺はそれを避け、偃月刀を賊に振るつた。

斬られた賊は胴体と足が真つ二つになり絶命した。

これが人を斬る感覚・・・胃からこみ上げてくる胃酸。それを無理やり呑みこみ賊と対峙する。

一撃で賊を斬つた俺に、賊達は呆気に取られたが直ぐに俺に向かつってきた。

そこからはよく覚えていない。気づくとそこには賊の死体が転がっていた。

これが殺すということ。母上を助けた俺は人を殺したといつ罪悪感に支配されていた。

「烈火・・・あなたが来てくれなかつたら、私はもつとひどい仕打ちを受けていたわ。

あなたは良い事をしたのよ。この人達の魂をあなたが背負い、この人達の分まで

生きなさい。今は思いつきり泣きなさい。」

「うわああああああつ！」

俺は思いつつきつ泣いた。母上の言葉に少し心の罪悪感が晴れた気がした。

俺が泣きやんだのはしばらくなしてだ。

「落ち着いた？」

母上の言葉に俺は無言で頷く。

「では帰りましょ。みんな待つてると困つか。」

「うして俺と母上は帰路に着いた。

この一件で俺は大きく成長したと思う。俺の故郷みたいな所がまだ沢山ある。

こんな世の中をじうにかしないといけない。俺はこの決意を新たに、母上の後を追った。

## 1-3話（後書き）

なんかまた短い・・・

感想おまちしてます。

## 14話（前書き）

いつもボーズです。最近毎日メンマを食べています。  
でねじね。

俺が自分の真名を取り戻してしばらくが経ち、俺は母上と一緒に、近くをうろうろしている賊を退治している。

村を荒らし、民を殺している賊は生きるために略奪、殺人しているのだ。

俺達が襲われている村を救つても、同じ人間を殺めていると思うと、

良い気分にはならない。助けた村人達から感謝をされると少しだけ気が晴れる。

そして、今日も賊に襲われた村を救つた。

「母上。こちらは終わりました。」

俺が賊の退治の終わりを知らせた。

「どうしたの？浮かない顔をして？」

俺の心中は、かなり複雑だ。それに気づいたのか母上が声を掛けてくれた。斬つていく賊の最後の顔。

俺を睨み、怨みながら死んでいく顔は一生忘れられない。

「いえ・・・人を斬ると、心が痛いのです。いくら賊でも同じ人間。

」の人達のこれからを奪つたと考へると辛いのです。」

俺はうつむき、偃月刀を強く握つた。

「烈火。その痛みは絶対に忘れては駄目よ。その痛みを忘れた時は、

」の賊みたいに、人を殺すといつことが快樂になつてしまふか

ら。

母上にそう言われた時、俺の目から、ひとすじの涙がこぼれた。

しばらくして、俺は一人で賊の退治をするよつになつた。

そして、近くの村などの賊退治をしてこりつて、俺に尊が付き始めた。

背中の龍を見た者は生きて帰れないという事から、龍の化身と言われ始めた。

そして今日も賊を退治し、村の人達から感謝されていた。

「龍の化身様、我がが村を救つていただきありがとうございます。

よろしきつたら食事を準備していますので、食べて行ってください。」

村長が食事を用意してくれていたので、その行為に甘えることとした。

食事をしていると、一つの食べ物が目とつた。

メンマだ。俺はメンマを口にいた。その時、身体中を何かが突き抜けた。

「うめ～っーー。」

なんだこのメンマのおこしね。こんなメンマは初めて食べたぞ。

俺はこのメンマの味に感動していた。

「すみません。このメンマはどう作っているのですか? よろしくか  
つたら教えていただきたい。」

俺はダメもとでこのメンマの製造法を聞いた。

「本来はお教えできませんが、村を救つていただいた方ですので  
お教えしましょう。」

そう言い、村長はメンマ職人を呼んできた。こうして俺はメンマ  
の製造法を教えてもらひ家に帰った。

村に帰つた俺は、早速メンマを作り始めた。

「兄上、何を作つて居るので?」

星が気になつたのか横から覗いてくる。

「メンマを作つて居るのや。星はメンマは好きか?」

「まあ食べれないって事は無いですね。」

星はあまり好きではないのか。完成したら食べさせてあげよ。

「完成するまで待つてくれ。絶対に好きになるぞ。」

星は楽しみにしています。と言い、母上と賊の退治に出かけた。

ひと月が経ち、ようやくメンマが完成した。ちなみに、さうじょう夫したのであの味を超えた。

「おーいー星。完成したぞ。食べてみてくれ。」

星は恐る恐るメンマを口に運んだ。すると、目を見開き、直ぐに表情が崩れ、しあわせそうな顔になつた星がいた。

「兄上・・・」のメンマはなんという味なのでしょう。今まであまり食べていなかつた私が恥ずかしいです。」

氣にいってもられたよつだな。俺は満足して食べよつと目に箸を伸ばしたが、目の上には何も無い。

星の方を見ると皿の目にはメンマの糸が出来ていた。

それからとこりもの、毎日のみみメンマを呑みつづけて来る星がいたのだ。

## 14話（後書き）

メンマ話しへ書きたかっただけです！

感想お待ちしています。

## 1-5話（前編）

おねがこします！

では1-5話どうぞ！

俺がメンマを作つてから、星がメンマを好きになつり、さうして俺でよくなつた。

「兄上、今田も賊を退治に行きましたよ。」

最近の賊の退治は、母上の代わりに俺が星と一緒に行くよつとなつた。

俺と行動している星は何か活き活きしてゐるよつに感じじる。

「兄上。今日の賊の退治が終わつたらまたメンマを食べさせてくれださい。」

「最近の兄上は昔と違つて、たくましくなられました。」

など色々言つて来ている。そんな事をしているうちに、賊が現れるところまでやつてきた。

「わざわざ遠い所からすみません。この村は賊に襲われ、男達は死んで殺しに合いました。」

残っている者も手負いや、老人、子供ばかり、この村が滅びゆくのも時間の問題。

そして、じまじくしたひこの村の食糧を奪いに賊がまた攻めて来るでしょ。」

ひこの村の村長が涙ながらに今の状況を説明してくれた。

「では今からその賊を退治に行きますので、賊は何処からやって来るのでしょうか？」

「一刻も早くこの村を救いたい。今の俺の頭の中はそれで一杯だ。で行くつもりで？」

村長は驚いたように言つていた。

「ええ。そのつもりですが。星行くだ。」

俺は当たり前のよつて村長にさづえ、星を呼び、村を出ようとした。

「お待ち下され……相手は一千位いるのですぞ……お一人では無理で  
しうつ……」

村長が声を荒げて俺達を止めた。

「大丈夫です。俺は龍の化身と言われております。心配はいりま  
せん。」

俺はそう言い、星と一緒に賊の所へ足を進めた。

辺りを警戒しながら俺達は賊の住処にたどり着いた。

どうやら入口には見張りがいるようだ、俺達は木陰で様子を覗つ  
ていた。

「兄上。私が斬りこんでまいります……」「星！待て！

星は俺の制止を無視して賊の住処に攻め込んで行った。

「我が名は趙子龍。村を襲う賊め！我が槍の餌食となるがいい！」

星がそう叫ぶと賊達が出て来た。あの馬鹿者。俺はそう思いながら星の後を追つた。

「なんだあ？たつた一人で俺達の相手をするのか？いい度胸じやね？」

お前ら！女は捕えて男は殺せ！掛け！」

そう賊の頭が言つと賊達が攻めて來た。

「ハ！ハ！ハ！ハ！ハ！ハ！」

星はかなりの勢いで敵を蹴散らしていく。俺はそんな星に違和感を感じた。

「兄ちゃん。よそ見してると危ないぜ！」

そう言いながら賊が俺に斬りかかって来る。俺は軽く避わし、堰

月刀で首と胴体を切り離す。

それを見た賊達が血相を変え、攻めて来た。

俺は心中で賊にすまないと思いながら賊を斬つていく。

「ひいいいっ！強すぎる！俺達じゃ敵わねえ！」

半分位斬った所で、賊が戦意を消失し逃げていく。

「俺は龍の化身と呼ばれている！命が欲しくば、武器を捨て、ここから立ち去れ！」

俺がそう言うと我先にと賊が逃げていく。だが星が戦意の無い賊に追撃をしていく。

「星ーもつ止めろーこれ以上無駄な殺生はするなー！」

俺がそう言つと、星が不思議そうな顔で俺を見ていた。

「何故ですか？あの賊という下衆の集まり、斬り殺して何が悪いの

です？「

俺は耳を疑つた。今星は何て言つた？斬り殺して何が悪いだと？  
その一言で頭に血が上る。

「星！お前は人を斬る事に何も感じないのか！？」

「いやつらは今まで沢山の人を殺めて来たのですぞ？悪を斬る事  
には何もためらいは在りませぬ！」

パン！

俺は星の顔に平手打ちを入れた。

「俺はそんな事を言つている訳じゃない！賊とか関係なくお前は  
人を斬り殺す事に

罪悪感があるのかと聞いていい！母上から何も聞いてないのか？

人を殺す事に罪の意識が無かつたらお前も賊と同じなんだぞ！」

俺の言葉に星は何かに気づいたような顔になり、やがて眼には多くの涙があふれて来た。

「兄う、え・・・私が・・間違つていまじだ・・・今の私は賊と一緒に・・・大切な事に・・

『氣づかせて・・・く、れで・・・ありがとう・・・』やります・・・

「

星は俺の胸の中で大きく泣いた。大切な事に気づく事が出来た星はさりに強くなるだらう。

そう思いながら俺は星の頭を撫で続けた。

しばらくして星も落ち着き、村まで帰った。

「賊を退治してくださりありがとうございます。村人を代表して感謝いたします。」

村長のお礼を聞きながら俺は決意をした。まだこの村みたいな所が沢山ある。

多くの人々を救いたい。もっと笑顔を作りたい。この腐った世の中はうんざりだ。

旅に出て、みんなを笑顔にしていきたい。俺は旅に出る決意をした。

そう思いながら村を後にした。

帰り道、俺は悩んでいた。龍の化身として噂がたっているのはいいが顔を見られるのは何か恥ずかしい。

何か顔を隠す物は無いか・・・そう思つてみると田の前を一匹の蝶が横切つて行つた。

これだ！仮面を作れば良い。蝶の仮面・・・何か良い名前は・・・  
華蝶仮面なんてどうだ？

よし！旅に出る前に早速帰つたら作ろう！

俺は気分良く自分の村に帰つていった。

星からほんの少しで見られながら・・・

## 1-5話（後書き）

やつと旅にでる前からやめた。

感想お待ちします！

## 1-6話（前書き）

前のやつが1-6話になつてた . . .  
訂正しました。

星と賊の退治から帰ってきて俺はさっそく、仮面を作り始めた。

かなりの試行錯誤を繰り返し、やがて完成した。

「ふつふつふつふつふ・・・」の流れのようない形。完璧だ。」

俺は暗い自室で笑っていた。その時、外で誰かの気配がしたので、俺は仮面を慌てて隠した。

「兄上、何を作っているので？」

ひょっこりと顔を出し、星が覗いてきた。

「何も無いぞ。星もこんな時間にどうしたんだ？」

「いえいえ。兄上の部屋から奇怪な笑い声がしたものでついつい  
氣になり、

いけない物だと解っていましたが好奇心には勝てず覗いてしま  
いました。」

星がニーヤニーヤしながらこちらの様子を覗つている。だがこの計画は誰にも知られる訳にはいかない。

星には悪いが白を切らしてもいいつね。

「本当に何も無いぞ！確かに笑っていたがそれはお前にだー

かわいい妹が今日の賊退治で成長したのに高揚して何が悪い！」

自分で言つてて恥ずかしいし、気持ち悪い・・・いや言い訳でもこれははちょっと・・・

でも星の成長が嬉しかったのは本当だ。

「嘘ですね。兄上は帰りからニーヤニーヤしてましたので・・・

囮られた！最初から気づいてたのかー！ここまで来たら俺も突き通す！

「だから星にだつて言つてるだり？それよりもメンマ食べるか？」

俺はダメ元で星の意識を逸らそうとした。どうだっ乗つて来い。

「絶対に嘘ですなーあのときからえへメンマですか? いただきますー!」

よし。なんとか星の意識を逸らせたぞ。

「それより星。話が有るんだが・・・」

俺が旅に出る事は最初に星に伝えたかった。

「ふあんべふか?」

星よ・・・食べてる時には喋らない。あれほど教えたのに・・・

「今まで賊を退治してきたが、それはこの辺りの賊だ。だがこれ以上に酷い所もある。

だから俺はその村などを救いたい。だから俺は旅に出るー

それに俺の記憶も取り戻さないといけないしな。」

「そうですか・・・今日の村で兄上は決意してたようすで私に止める権利はありませんね。

「さみしくはなりますが、これも兄上の為・・氣をつけて行ってください。」

そう言いながら星は俺の部屋を出て行つた。

あれ？星なら着いて来るとか言つてきそうだったんだが・・・まあいいか。

明日、父上母上に旅に出る事を云々と。やつていながら俺は眠りについた。

次の日

「父上、母上、俺は旅に出たいと思います。今まで近くの賊を退治をしてましたが、

他の所でも同じようになつてこるはずですーこの世の中を見て回りたいのですー」

俺は真正面から一人に気持ちをぶつけた。

「そろそろ言つ頃だと思つてたわ。あなたもそつまうね？良いでしょ。行くといいわ。」

母上から思いもしない返事がきた。解つてたのか？

「そうだね、これもいい経験、烈火、がんばってきなさい。」

父上からも激励を受けて俺が旅に出る事は正式に認められた。

「ならば」の後出発したいと思ひます！

うかうかしてられない！あんな村を沢山出すわけにはいかない！  
俺は荷物をまとめに、

自室へと向かった。

路銀よし。食糧よし。壙月刀よし。そして忘れてはいけない仮面よし！

俺はしつかり確認して出発するため最後の自室を出た。外には俺

の出発を聞きつけた

村人全員が来てくれた。みんなから激励を受けていたが、星の姿がない。

「星は寂しくて泣いてる所を見られたくないのよね。」

母上が笑いながら言っている。まあ星とは昨日言ったから大丈夫だろ。

「ではみなさんー趙昂行つてまいります！」

そう言い、俺は村を出た。みんな最後まで手を振つていたがその時。

『フオオオオオオオフ！－！－！』

何かの叫び声が聞こえた。何か星の声っぽかっつきがするが・・・

俺は気になつたが、盛大に見送られて、また戻るなんて恥ずかしいのでそのまま足を進めた。

俺の荷物から仮面が無いのを気づかずに・・・

## 16話（後書き）

ようやく出発しました。

長かった?のかな?次はちょっと聞話しどを入れます!

感想お待ちしております!

今日は毎の話です！

「俺は旅に出る。」

兄上がそう言った。薄々感づいていた事だった。

兄上は近いうちに必ず旅に出て行くだらうといふ最近の賊の退治で思い始めた。

「そうですか・・・今日の村で兄上は決意してたようすで私に止める権利はありません。

さみしくはなりますが、これも兄上の為・・気をつけて行ってください。」

私はこれだけの言葉しかかけられなかつた。本当は私も行きたい。

だが私はまだ未熟だ。力はもつ問題ないはず・・・だが以前、兄上に言われた言葉。

『人を殺す事に罪の意識が無かつたらお前も賊と同じ』

その言葉を聞いた時、私の未熟さに気がつくことができた。

今旅に出てしまえば、また以前の私みたいに殺す事に罪を感じない者になると感じ、

兄上の旅には同行しないと決めていた。

私は泣きそうな顔を見られたくないため、兄上の部屋から出て行つた。

自室に着いた私は、思いつきり泣いた。兄上がいなくなる。

そう思つだけで、悲しくなる。解っていた事なのに・・・私は初めて心の中から泣いていた。

やがて泣き疲れて眠つてしまつたのかいつのまにか朝だつた。

外には兄上の旅立ちを見送る村人がいた。私も早く行かないといけない。

そう思い、私は急いで部屋を出ようとしたが足が止まる。

私の目はかなり腫れている。この顔を見られたらかなり恥ずかしい。

兄上の部屋からなら見られる。私はそう思って急いで兄上の部屋に行つた。

兄上の部屋まで来ると、もう出発しそうだった。私は窓まで行こうとしたが、

何かにつまづき、派手にこけてしまつた。

何につまずいた何かを見るとそれは、蝶の身体を似せて作ったのか、かなり美しい物だった。

私はその仮面を見つめる。付けたい。今の私を支配するのはそれだけである。

じへ・・・ドキドキドキドキ・・・

付けたい・・・じつしても付けたい。いけないと解つてゐるが止まらない。

吸い寄せられるように私は仮面を付けた。

仮面を付けた瞬間、私に何かがこみ上げてくる！

「フオオオオオオフ！！」

変な奇声を出しながら私は華蝶仮面になつたのだ  
・

短かったです・・・

感想待つてます！

これなり一年まじ町まつまつー！

俺が村を出てもつづべ一年になる。

この一年はいろいろあった。やはり最初は、仮面の紛失だ。

村を出てからじぱらくし、腹が減つたので食べようと思ひ、袋を開けようとした時に俺は有る事に気付いた。

仮面が無いのだ。いくら探せども見当たらぬ。袋を良く見ると、仮面を入れた所に穴が開いていた。

つまり、家を出る時にはすでに落ちていたところとなる。自信作だったのに・・・

仕方なく仮面は泣く泣く諦めることにした。

今は旅の武芸者兼メンマの商人として旅をしている。

ついた村や街でメンマ売りや、攻めて来た賊を退治して路銀を稼いでいる。

商人もしているので、俺自身も賊に襲われる事もかなりあった。

朝廷が腐っている証拠だとしみじみ感じた。

これがこの一年で感じたことだ。

そして最近、変な噂を聞くよつになつた。

行く街などで良く聞く、天の御使いといつものだ。聞いている予  
言は、

『空から流星が舞い降りる時、天からの使者が現れん。時に、背  
に龍を抱えし者、

乱世を終わりに導かん。』

と聞いている。一つは明らかに俺の事だ。俺つて凄い立場にいる  
んだなとしみじみ感じた。

天の御使いはいつたい何だろ？

そう思いながら、俺は次の村を手探し、荒野を歩いていた。

すると、空が急に明るくなり、俺は空を見上げた。そこには流れ星があった。

予言は本当なんだと思いながら俺はその星を見ていた。

その星は明らかに一つの方向に落ちてきている。俺に向かって・

「冗談じゃねーぞ！」

俺は全力でそこから逃げた。

ズドーン！

そんな音と共に、流れ星は地面に落下した。俺のメンマが犠牲になつたが・・・

何だろ？手から汗が出てきてる。そんなことより俺は星が落ちた所を恐る恐る覗いた。

やうには見たことも無い衣服を身に纏い、氣絶している男がいた。

「なんだ? こいつ・・・」

俺はそいつを起しこいつと近付いた。賊に襲われちゃかわいそうだし。その時。

「ちよおと待ちなさいああいー。」

そんな声と共に現れたのは、鍛え上げられた筋肉に小麦色の肌をし、耳の所だけおさげをし、

もつとも田舎の男の陰部にわざと、桃色の下着を身に纏つた化け物がいた。

17話（後書き）

登場！一刀＆貂蝉！

久し振りです！

でわざわざ！

「ギヤアアアアアつ！化け物おおつ！」

俺は目の前に現れた物体にかなり混乱していた。

「あら失礼ね。私は貂蝉。魅惑の踊り子にして、絶世の美女。れつきとした才・才・才よん。」

「こんな人外な物の何処が乙女なんだよ・・・」

俺はこの貂蟬という男?に吐き気がして いた。

「違ひねえー漢女よ。アリハで話しが変わらねえかしらん?」

急に貂蝉が真面目な顔をして俺に向かい合つた。気持ち悪い・・・

「あなた、龍の化身の・・・今は記憶を無くして趙昂 天龍の名前で間違いないかしら?」

こいつ……俺の何かを知っている……貂蝉の言葉に俺はそう

感じた。

「確かに間違いない。だが一つ聞きたいお前は俺の過去を知っているな？」

「こいつは母親を殺した奴かもしれない。自然と黒龍堰月刀に力が入る。

「ええ・・確かに知ってるわ。でも安心してねん、あなたの母親を殺したのは私じゃないわよん。

「私もその男を追っているのよ。」

「貂蝉もそいつと何かの因縁があるようだ・

「でも私は直接その男に接触できないの。それが出来るのはアナ・タだけなの。」

腰をくねらせて言つてゐる。行動一つで吐き気がくる。

「事情はわかつたからとりあえず腰をくねらせるなーといひで何でそんなに嬉しそうなんだ？」

さつきから落ちて来た男の方をかなり見ている。

「あつら～ん！氣づかれちゃったみたいね～ん。この人は私の愛する」主人様なのよつ！」

あんな露骨な態度してたら誰でも氣づく。それよりこの男は災難だな・・・

「「」いつをどうするんだ？」

俺は何気なく貂蝉に聞いてみた。

「な～に。連れて帰つて私のたつぱりな愛を注ぎ込むのよつ。」

聞かなければ良かつた・・・俺はかなりの後悔につぶされそうだつた。

「それじゃ、私は」主人様を連れていくわん。ぐれぐれも死なないでねん！

「この世界の命運はあなたにかかるんだからん。最後にこれを渡しどくわん。」

そう言いながら貂蝉は、下着の中から首飾りを出してきた。

「ちょっと待て！今お前は何処からそれを取りだした！？」

「何処からつて私の愛情の下着の中よ〜ん。」

い・・・  
貂蝉はそう言いながらその首飾りを無理やり俺に掛けた。生温か

「それは龍の爪よん。アナタの力になるはずよん。」

それなら確かに有りがたいが出て来た所を考えるとすつゞく嫌だ。

「それじゃーねん！ぶうるうあああああー。」

奇声を上げながら貂蝉は少年を連れて走つて行つた。

変な声、助けを求める声が聞こえたが、聞いてないふりをした。

「これからどうするか……とつあえずメンマを作り直して、待ちを田指すか。

俺はそういう思いながら、なんとか残ったメンマを回収して次の街を田指した。

短いですが更新しました！

貂蝉の所ちゃんと書けたかな・・・？

いよいよ次は恋姫武将が登場します。

感想お待ちします！

## 1-9話（前書き）

どうも1-9話めです！

ようやくあの人達がでてきます！

貂蟬と別れた後、俺は街に壊れた荷台の変わりを買いに行き新しい荷台と共に、

今は湖のほとりの森を進んでいる。

「後で水浴びでもするかな。」

そう呟きながら俺は荷台を引く足を止め、辺りを覗つた。

すると木の陰から賊が30人ほど出て来た。

「よう一商人さん。死にたくなかつたらその荷物と金を置いていきな!」

賊の頭らしい人物がそう言つてきている。まあ護衛も付けず、一人で物売りすれば、

格好の獲物になるよな・・・」れで何回目だろ?

そう思いながら賊と睨みあつ。

「おい！聞こえねーのか？荷物と金を置いてどこかに失せりと  
つてんだよ！」

「へへつ。アニキ！たぶんこいつ恐くて動けないようですが、ぜー！」

賊の頭と手下が何か言つてゐようだが別に恐くはない。

明らかに斬りかかつてくるよな・・・あまり人は傷つけたく無い  
が仕方ない・・・

「断るーーお前達に置いていく物なんて無い！」

「なにい？お前一人で何ができる？お前達ーーこいつを殺して全て  
奪つてしまえ！」

その掛け声と共に、賊達が一斉に向かつてきた。

ん？何か向こうにも気配が立つするだ？

そう思いながら賊との交戦が始まった。

side?

「ねえ！あそこで商人さんが賊に囲まれてるよ！助けなきや！」

わたしは、一緒に旅をしている一人に商人さんが危ないから助けようと言った。

「どこのだ！？弱い物いじめをする奴は鈴々がぶつ飛ばすのだ！」

！」

「お待ち下さい桃香さま。あの商人、ただの商人ではありません！」

え？ どういふこと？ わたしは解らず、首を傾けた。

「どういふこと？ 愛紗ちゃん？」

「はい。あの者はかなりの武を持っております。この人数の賊など直ぐに片付くでしょう。」

愛紗ちゃんがそう言つたので、商人さんの方を見ると、賊の人たちが一斉に商人さんに向かつて行つた。

そこからは驚きの連続だつた。商人さんは、荷台に乗せた武器は使わず、素手で相手を倒している。

賊の人たちはあつといつ間に倒されて逃げて行つた。それよりもわたしは、

かぶり物をしているから顔は見えないけど、確かに見えた、動きと共に服がめくれて、

時折見せる背中の龍が・・・間違ひ無い！あの人、予言に出てた龍の化身さんだと。

（烈火）

ふう。なんとか殺さずに全員逃げて行つたぞ。それよりも・・・

「おい！そこに居る三人そろそろ出てこい！」

俺は、賊との戦いをずっと見ていた者達に言つた。出来たのは桃色の髪をした女と、

赤い髪をし、身の丈の倍以上もする得物を持った女の子と、俺と同じ堰月刀を持った、黒い髪の

『ズキン！』女がいた。何故頭痛？黒髪をした女を見たら頭痛がした。

「凄いですね。いつから気づいてたんですか？」

桃色の髪をした女が言つてきた。頭痛も一回きりでもう無い。

「最初からだよ。賊に囮まれたあたりかな。所で君達は誰だい？」

俺は三人に聞いた。

「あつ申し遅れました。わたしは劉備、字は玄徳といいます。」

「鈴々は張飛なのだ！よろしくなのだ！」

「うむ、我が名は関羽、字は雲長と申す。それよりそなたの顔を伺つてもよろしいですか？」

俺としたことが忘れていた。かぶり物を被つていたらいけないな。

「失礼。俺の名は趙昂、字は天龍。訳あつて旅をしている。ようしぐ。」

そう言い、俺はかぶり物を脱ぎ、三人に顔を見せた。

ん？ 関羽の様子がおかしい。下を向いて震えている。どうしたんだ？

「おい関羽。 どうした「烈火ああつ！」んだ！？」

そう言いながら関羽が俺に抱きついてきた。

えつ！？

蜀の三人がようやく出ました！

一行までくるのが長かった・・・

感想お待ちしています！

今回もがんばります！

「烈火ああつ！！」

そう言いながら俺に飛び込んで来た関羽。何故俺の真名を知っている？

不思議な事に、関羽とは初めて会つた気がしない・・・それに、懐かしい感じがする・・・

故に真名を呼ばれても嫌な気がしない、むしろ呼ばれていたい。

だが俺は関羽の真名を知らない。いや、忘れているんだと思つ。

関羽は記憶を無くす前の俺を知つてゐる・・・なら夢に出てきていた『愛』と言つ人物なのか？

だがそれの確信も持てない。関羽は俺の胸の中で泣いていりだ。

「生きていたんだな・・・私が村を離れていく間に村人の虐殺・・・

・村の壊滅。

久し振りに戻つて来てみれば豊かだつた村が何処にも無くお前の姿も無かつた。」

つまり関羽も俺と同じ村の出身なのか。良かつたな生き残りがいて・・・

俺はそう思いながらも身動きが取れないのでそろそろキツイ。

「関羽さんそろそろどうしてられないかな? 苦しい・・・

関羽は俺に思いつきり抱きつかれて泣いてるので息が苦しくなつた。

「あつ・・すまない。烈火。それより何故私の事を真面目で呼んでくれない?」

「呼んでくれないと言つてもすまないが君の事も村の事も覚えていないんだ。」

俺は関羽に何も覚えていない事を伝えた。かなり辛い物が駆け巡る。

「えつ・・・? 何も覚えていないとはどういう事だ!」

関羽が声を荒げて俺に迫つてくる。

「なら・・・幼少の時に私と交わした約束も覚えていないといふのか!?」

幼少の約束・・・?あの時折夢に見るあの光景か?するとやはり『愛』と書つ

人物は関羽で間違いないのか?俺はあの夢を思い出すように意識した。

だが女の子の顔には靈みが掛かっていて見ることはできない。

「お前は、言つたはづだ!私を超え、大陸一の武人になると云つたはづだ!」

関羽のその言葉で靈みの掛つたその記憶が晴れて行く。間違いな  
い。

あの子は関羽そして真名は愛紗。俺はこの子の事を俺は愛りやんと呼んでいた。少しずつ蘇る俺の記憶。

確かに思い出した。まだ記憶の一部分にすぎない。・・愛紗には申し訳ないが、

この事をまだ言へきではない。愛紗に全ての事は全て思って出した時だ。

「すまない。・・・解らないんだ。・・・」

俺の言葉で愛紗は俺を掴んでいた手を離し、その場に力無く座り込んだ。

「あのあーりゅーりと良いですか?趙昂さんの事詳しく教えてくれませんか?」

俺達のやつとりが終わったのを見計らい、劉備が話に入つて來た。

ちよつじ話やつとしていたから話しておひや。

「やつきの関羽との話で解っていると思つが、俺には十歳位からの記憶が何故か無い。

確かに聞く話では関羽と同じ村の出身のようだが、記憶が無いおかげでそれも解らない。

だから俺は自分の記憶を取り戻す為にこうして商人をしながら旅をしている訳だ。・・・・・

俺は大体の俺の状況を二人に説明した。龍の化身という事は言つてはいけない。

「そ、うなんだ・・・・・趙昂さんも大変なんだね・・・・・」

「記憶が無いなんて大変なのだ・・・・・。」

劉備と張飛は心配な面持ちで俺を見ている。そこまで気にしなくていいのに・・・

「その時はちよどあの村が壊滅した時と同時期・・・やはり烈火・・・いや趙昂殿は

その村の事件に巻き込まれ、何かしらの理由で記憶を失つたといつわけか・・・・・

愛紗は拳を握り絞め悔しそうにしている。

やはり愛紗は同じ村の出身だから自分の故郷が無くなっている事で俺と思つ気持ちは一緒か・・。

「でも趙昂さん。何であんなに強いのに商人なんとしてるんですか?」

「そうなのだ!賊をすぐに倒しちゃうのに商人なんでもつたいないのだ!」

劉備と張飛は一人して商人はもつたいないと言つてゐるがこれには訳がある。

「商人をしているはある理由が在るからだ。俺の記憶に関係していそうなある人物を探してゐるんだ。

商人ならそういう噂などが直ぐに手に入るだろ?」

「でもな、いくら調べても手掛かりの一つも見つからない。ただそいつは近いうち」

「必ず現れると思うからね。それまでどこかに武官じょりと考えてるんだ。」

どこかに武官でもしよう。俺は今自分の考へてる事を三人に言つた。

何故か三人は嬉しそうな顔をして俺を見ている。

「だつたらわたし達の仲間なつて下さいーこの世の中は今、かなり辛い状況になつています。

民達の笑顔が無くなる世の中なんて見たくありませんー今まで三人でがんばつてきましたけど

もう限界が来ています。だから龍の化身である趙昂さん力を貸してください！

「鈴々からもお願いするのだー趙昂のお兄ちゃん鈴々達と一緒に居て欲しいのだ！」

「趙昂殿私からもお願いします。」

三人から期待の眼差しが俺に刺さつてくる。三人の考えは俺と同じか・・・三人の目は本気だ・・・てか龍の化身だつてもうばれてるよ・・・

「劉備に聞きたい、何故俺が龍の化身だとわかつた？」

俺は三人がいつそれを知ったのか気になつた。

「え？ さつ毛賊と戦つてゐる時にチラチラ見えてましたよ！？」

やつぱりその時か・・・まあここにさうの子達と俺の田端す物は  
一緒にみたいだしな。

「いいぞ！俺でよかつたらいくらでも力になる。これからよろしくな！」

「いいんですか？やつたーー！」

劉備がはしゃいでいる。そんなに嬉しいのかな？

「ところで今からどうするんだ？」

俺は今後の方針を三人に聞いた。ここでは良く話せないしな。ついでに腹減ったし。

「まだ決めてませんよ。」

劉備さん・・計画無いですか?自信満々に答えられても困ります  
よ・・・

「まあ腹もすいたし、この先の街にでも行って飯食いながら今後  
を決めるか。」

俺はそう提案しみんなが納得したのを確認し、この先の街へと向  
かつた。

後ろのまつで『一日ぶつこの飯だー』と聞こえたのは空耳だと信  
じたい・・・

20話（後書き）

なんか長いきがする・・・烈火は蜀の三人と行動を共にしていきます。

感想お待ちしています！

## 2-1話（前書き）

「んばんわ！」

お盆で太ってきているボーズです。

でまじめ。

幽州という街に着いた俺達四人は、今後の事も踏まえてとある飯店で食事をしていた。

「ところで趙昂さんは、何の商人をしてるんですか？」

劉備が俺が売っている物が気になっていたのか聞いてきた。別に隠す事じゃないしな。

「メンマだけど。知ってるか？丸天印の壺メンマを？」

俺は自分が作り出したメンマをメンマの極みだと自負している。それを軽く自慢げに言つた。

今までの街や村に行けば噂になつていいほどである。

一時期は本氣で武人を辞めよつたといつ一時の氣の迷いをしたこともあった。

「えつ！？ 天印の壺メンマはこの辺りや、私達が旅してきた村

ではかなつ有ねでしたよー。」

「確かにそのメンマの話は良く聞くわ。何とも『』のメンマを食べると他のメンマを

食べれなくなるほど美味しいー。』と食べた民が言ひまじとお聞きしてこます。」

「そりなのだーだからいつか食べてみたいってみんなで言つてたのだ！」

劉備、関羽、張飛は凄い剣幕で言つてゐる。張飛ちゃん・・・食べ物がかかつてま

俺は話を聞く限りではこのメンマを食べた事がないと言つてゐる。

まあ売れば直ぐに売却してたからな。やつぱり凄いこのメンマ・

「どうい事は三人共このメンマを食べた事ないのか?」

「はい・・・一度も食べておつません。」

「私達が行く頃にはもう在庫が無い時ばかりで・・・」

「だからメンマを売っている人を見つけたら食べさせてもらおうと思つてたのだ！」

「この三人はそんなにこのメンマを食べたかったのか？あと張飛。欲望が出ていますよ・・・」

「よほど食いたかったのか？なら食つか？」

「そう言ひ、俺は懐に入れている酒の肴用の壺メンマを取りだした。

取りだした瞬間三人の目が獲物を狩るような眼をした事は忘れない・・・

「これがあの幻のメンマ・・・」

「とうとう私達が食べる時が来たんだね！」

「早くたべるのだ〜！」

三人ともそんなに神々しくメンマを見るなよ・・・

「「「「ただそれも…」」」

三人は一斉にメンマを口に運んだ。さてさてどんな感想を言ってくれるのやい。

俺はメンマを噛みしめ、呑みこむ三人を観察していた。

食べた三人は呑みこむと急に震えだした。

「うまいこと……だ——」の——だ——

その言葉と同時にじんじん無くなる姫メンマ。 じんに食べへくれるなんて星以来だな・・・

そういう星は今頃なにしてるだろ？か・・・母上も父上も元気かなあ・・・

俺は急に妹や家族の事を思い出した。特に星は今何をしているのかかなり気になる。

「もう言えれば何か忘れてる・・・そうだ！今後の方針だ！メンマの話題になっちゃいけないだろ！」

「もう言えれば今からどうするんだ？」

メンマに夢中の三人にこれからを聞いてみた。それを聞かないと話にならないだ。

「これからですか？まず義勇兵になり太守の兵として参加するのはどうですか？」

愛紗がそう答えた。あの一人は今だにメンマに夢中です。

「義勇兵か・・・悪くないな。それで行こう！」

俺は愛紗の意見に賛成し、これから義勇兵として何処か募集しないか聞きに行くため食事を終わらせた。

「やあ腹もいっぱいになつたし、そろそろ行くぞー御馳走様！」

俺がそう言うと急に三人の顔色が曇る。 いったいどうしたんだ？  
なかなか言いだせないようだ。

「え～っと・・・趙昂さん商人さんだからお金沢山持つてると思つて・・・」

「鈴々達は一日ぶりの『』飯だったのだ・・・」

「ん？つまりこの方はお金持つていないと云つて？俺に全額払わせるつもりなの？」

それにしてはみんな容赦なかつたよね・・・特に張飛！

「つまり三人共お金を持つてないと？」

「面目ない・・・」

関羽がとてつもなく申し訳なさそうに頭を下げる。

まあいいや。今まで稼いだお金が在るからな。

それにこれからは武を基本に置いていくから商人はもう終わりだし、これから旅をしていく

仲だしな、ここは面倒みてやるわ。

会計を終えた俺達は店の女将からこの幽州の太守、公孫賛が義勇兵を募集していると聞き、

まずはそこに向かうという事で決まった。その時、俺達の話を聞いていた女将が、

この酒と壺メンマを交換して欲しいと言つてきた。特に嫌な交渉では無かったので快く交換した。

公孫賛の所へ向かう途中、見事に綺麗な桃園を見つけた俺達はそこでこれから結束した

姉妹として誓いを立てようと言つ事で四杯の杯を天に掲げた。

「我等四人！」

「性は違えども、姉妹の契りを結びしからは！」

「心を同じく助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ!」

「同年、同月、同日に生まれる事を得ずとも!」

「願わくは、同年、同月、同日に死せん事を!」

「民との幸せを願わん!」

「「「「乾杯!」」」」

「うして俺達は、この乱世に身を投じた。

## 21話（後書き）

ようやく桃園の誓いまできました！

最後の文は自分で考えました。

感想お待ちしています！

桃園での義姉妹の誓いをした俺達は、公孫贊のいる城へ向かおうとしていた。

「ちよつと待つのだ！！」

張飛が出発しようとしていた俺達を呼びとめた。

「どうした？ 鈴々？ まだ食い足りないのか？ 城に着くまで我慢しろ。」

愛紗があきれながら張飛に言つているようだ。だが張飛の様子はおかしい。

「そんな事はどうでもいいのだ！ せつかく鈴々達は姉妹の契りをしたのに、

趙昂のお兄ちゃんの真名を預かつてないのだ！ これからずっと一緒に不平等なのだ！！」

「あつ！ 確かに鈴々ちゃんの言つ通りだね。真名も預け合つて無いのに姉妹とか出来ないもんね。」

「そう言えればそうだな。契りを交わした仲だからな。真名も預けるのが常識だよな。よしー。」

「すまない。正式に名乗りつつ。我が名は趙昂 字は天龍。真名は烈火だ。

〔記憶を戻すと我が使命、乱世の終結を目指し旅をしていく。これからようしきくな！〕

「私は劉備、字は玄徳。真名は桃香。烈火さんようしきお願ひします。」

「鈴々は張飛、字は翼徳。真名は鈴々なのだ！烈火お兄ちゃんよろしくなのだ！」

「我が名は関羽、字は雲長。真名は愛紗。烈火の記憶が戻るまで、私は趙昂と呼ぶからな。」

「三人の真名を預かり俺達は本当の義兄弟（姉妹）となつた。

「すまない愛紗・・・記憶が戻るまで俺も関羽と呼ばせてもらひつつ必ず思い出させるからよ。必ず思い出させるから

それまで待つていてくれ！」

俺は関羽の手を握り締め固く誓つた。

ん？何やら関羽の顔が偉く赤いがどうしたんだ？

「おい関羽。熱もあるのか？顔が赤いぞ？」

「べつ別に熱などは無い！そんな事よりも早く公孫賛の城に行くぞ！」

関羽が速足で進み出したので慌てて追いかける二人。

「えへへ。愛紗ちゃん照れちゃって。可愛い！」

横で桃香が何かを言つてゐるようだが何の事が解らない。女  
つて解らないな。

関羽に追いついた時にはもう城の前まで來ていた。

「桃香様、どうやら公孫贊の城はここなのですね。」

関羽が桃香に確認を取つていいようだが桃香は聞いていないようだ。

何か考えているような感じがしている。

「どうしたんだ桃香？」

わざわざからぶつぶつと独り言を言つてこの桃香に我慢できず、俺は思わず聞いてしまつた。

「公孫贊……公孫……贊……あつ……思い出した！公孫贊つてどこかで聞いた事

があるつて思つてたひ蓮ちゃんの事だよ！小さい時に私塾で一緒に勉強してたんだ。」

知り合いか。なら話しても直ぐに終わらしちだな。それにしても、忘れる位の人なんて

可哀想だな……」この太守は存在感無いのか？

「じゃあ桃香。門番に取り次ぎを頼むよりつて言って来てくれ。」

「了解! 行つて来るね!」

そういうこながら桃香は門番の兵士の所に向かつた。

兵士からしじばらへ待つよつて言われて俺達はしじばらへ待ち、戻つて来た兵士から中に入るよう

言われ、城の中に入った。

「お~桃香久し振りだな! 元気にしてたか?」

「あやーーー白蓮ちゃんも久し振りだね。まさか太守になるなんて凄いねーーー。」

二人は昔の話で盛り上がつてこるよつだ。このままだと更に話に火がつきそうだ。

やうやく止めておかないと。

「公孫贊殿。積もる話もあるでしょ、が私達が来た理由も聞いてくれませんでしょ、うか？」

俺は一人の話しを中断させ、一いつ瞬に意識を向いてもらった。

「すまない。あまりにも懐かしくてつい話しこんでしまった。要件はなんだ？」

よひやく話の本題にいける・・・

「白蓮ちゃんの所は義勇兵を募っていたでしょ、その話を聞いて私達は義勇兵になりに来たの。」

桃香がここに来た理由を必死に説明している。

「おー！ ありがたい！ 今は一人でも兵が欲しかったんだ。今はうちにいる将達は

遠征に出ているからなそいつらが帰つてきたら詳しい話を聞こうじゃないか！」

長旅で疲れているだろう？ ゆっくりしていってくくれ！」

こうして俺達は公孫賛の所でしばらく世話になる事になった。

今出て行っている将はどんな人達なんだろうと思いつながら、俺達は部屋から出て行った。

## 22話（後書き）

ご主人様なんて言わせないよ！

いよいよ次に待っていた人物の登場です。

感想お待ちします！

23話（前書き）

メンマを食べたい！

でわざわざ

公孫贊の所にやつて来て3日がたつた俺達。桃香の旧友といふ事もあり、

城の周辺も自由に動けていた。信頼されてるんだな。

俺は暇を潰す為に、近くの飯店で働いていた。主に仕込み中心で。

～関羽side～

私達は、公孫贊殿から話しがあると言つ事で玉座まで来ていた。

「わざわざ集まつてもうつてすまないな。ここに来てもうつたのは桃香達がここに来た

理由を詳しく知りたいからだ。桃香話してくれ。」

「えつとね。私達は今まで三人で村を渡りながら困った人達を助けてたの。

でも三人だけじゃ助けられる所も限られてくるでしょ？だから大きな部隊に

入つて今までより多くの民を救いたいと思つて白蓮ちゃんの所に来たの。」

桃香様が私達がしてきた事を事細かに話している。それにしても趙昂は何処行つたのだ？

確かに昼には戻ると言つていたが、とっくに過ぎているぞ？

公孫贊殿は気にしていないようだが・・・

「よく解つた！桃香の実力はある程度解るが後ろの一人はどれほどなのか・・・」

失礼なつ！私と鈴々の武は一騎当千の物だぞ！

「おや？伯珪どの。見た目で相手の強さを見極めねば、更に上へはいけませぬぞ？」

「そうである。黒髪の者。」

私が少し頭に来ている時、ふと現れたのは見た事無い人物だった。  
「いつ強い……」

「おお！ 星帰っていたのか！ 予定より早かつたな。みんなに自己紹介をしてくれ。」

「私は趙雲 字は子龍と申す。伯珪殿の所で客将をしている。」

ふむ。この者……やはりかなりの武の使い手だ。何やら小さい趙昂と対峙しているようだ……

「そう言えばお兄ちゃんはどうしたのだ？」

ようやく鈴々が趙昂が居ない事に気付いた。

「ん？ もう一人いるのか？ その者はどうしている？」

趙雲が趙昂の事を探している。あやつは本当に何処にいったのだ？

「公孫贊殿、そういうえば趙昂は何処に行っているのか知っているか？」

私は何も言わず何処かに行つた趙昂の行方を公孫贊殿に聞いた。

「ああ。あいつなり」「すまぬ。今何と言つた?」「この……?」

公孫贊が答えようとしている途中で、趙雲が割つて入つてきた。  
それにはかなりの剣幕で問いただして来る。

「趙昂の事か?」

私は凄い剣幕で迫る趙雲に押されながら答えた。

さつきまでの穏やかな感じが全く消えている。趙昂と知り合いか  
のか?

「趙昂なら城の近くの飯店で働いているだ。何か働きたいと言つ  
てな……つて星ど」「行く?」

公孫賛殿の話の途中で部屋を出て行こうとする趙雲。その時。

「ただいまー！」

趙昂が帰ってきた。趙雲が部屋を出ようとすると同時に開かれた扉は勢い付いた趙雲を止める事が出来ない。つまり：

ゴツンっ！

二人は凄い勢いで衝突したのだ。あれは痛いな…

私は倒れた一人に合掌した。

「痛つてー！ 一体誰だよ……あ！」

「すまぬー私は先を急いでいるのだ。でわ……あ！」

見つめ合つ二人。私の中で嫌な物が駆け巡る。この一人は何なんだ？趙昂が一人で旅をしていた時の知り合いなのか？

「兄上ー」「星ー」

趙雲が趙昂に飛び付き、まるで子供のよつに泣いている。

ん？趙昂には兄弟は居ないはずだ。何故趙雲は兄と読んでいるのだ？そもそも趙昂もこの名は本当の名では無い。記憶が無くなった時に何か合つたのだな。

と私は思いながら一人を見ていた。

追加しました！

## 24話（前書き）

お久しぶりです！

ではどうぞ！

（烈火）

「兄上ーー！会いたかったですぞおおーー！」

と言いながら、抱きついて来る星。

一年ほど会つていなかつたからな、えらいく懐かしいな。

「星。久し振りだなー・ちょっと見ないしつて大きくなつて。お前も旅に出たのか？」

「何爺くさい事言つてんだ俺は？まあ会いたかつたからな。兄ちゃんは嬉しいぞ！」

「なんだ星？趙昂とは知り合いなのか？」

公孫贊が俺達の関係を聞いてくる。一いつ俺達のやりとり聞いてなかつたのか？

「ん？伯珪殿。私達の会話を聞いておられなかつたのですかな？」

星が俺が思つていた事を言つてくれた。出来た妹だよお前は。

「公孫贊、星は俺の妹だよ。」

「おおー。ならお前が星が言つていた、兄かー色々聞いていのぞー。」

色々だと？星は俺の事を公孫贊に向て言つているんだ？気になる。

・

「星・・お前は俺の事を向て言つてるんだ？」

「はて？あのままに伝えていいだけですよ。私の大切な兄上だと。

・

はぐらかしたな「イツ・・・美しいや。

「所で今は何の話をじてたんだ？」

俺が居ない間に何やら話をしていたよつだじ。桃香達もこれから事を話しているだう。

「えつと、ここに来た理由まで話したよ。」

桃香が俺の居なかつた時の事を話してくれた。

そこまで話してゐのか。なら話しが早いな。

「まあ桃香が話してくる通りだ。俺達を雇つてくれるか?」

「・・・ああ、桃香の実力は知つてゐる。他の一人も星が認めている位だ。

趙昂の力は解らないが、星の兄だから実力はかなりの物を持つてゐるだろう。

前も書いたが、今は少しでも兵が欲しい。私に力を貸してくれ

!」

じつして俺達は正式に公孫賛の兵（密将）としてお世話をなる事になつた。

「うん！ 私たちん頑張っちゃうもんね 」

桃香が張り切つて胸を張つてゐる。これ位気合いが入つてゐるなら心配ないな。

「関羽殿も張飛殿もよろしく頼むぞ。」

「ああ！ 我が力とくど！」覗じる。

「鈴々に任せるので！」

星も関羽も鈴々も挨拶を済ませたみたいだな。

「兄上。兄上のあの武が久し振りに見れると思つとは・・期待してますぞ。」

星からの激励も受けたからな。民の平和を思つて頑張るか！

こうして六人の気合いも入り、陣営が決まるまで、この先の戦いに備えた。



## 24話（後書き）

どうも！

最近なかなか進みません・・・

誰か文才をください！

感想お待ちしています！

パソコンが雨に濡れてしまいました・・・

恋姫のソフトが出来なくなつた・・・

どうしよう・・・

公孫贊の正式な密将になり更に数日が経つた。

そしてとうとう賊の討伐の任が来た。公孫贊の兵に呼ばれた俺達は武装をし、城門に向かつた。

城門まで来ると既に公孫贊の兵達が整列していた。やつと5000位か？

「すつゝーーーーの兵隊さん達は全部白蓮ちゃんの兵隊さんなの？」

桃香が綺麗に整列した兵に興奮しながら公孫贊に聞いていた。

「そ、うだーー」と言いたい所だが、残念な事に、正規の兵は半分ほどだあとは義勇兵なんだ。」

ほほう。だがここまで義勇兵が集まるのは公孫贊の力量だな。流石だ。

「義勇兵が集まるのもこの世の中が苦しい状況だと嘆か。この世はまだなつて行くのか・・・」

関羽の顔が少し暗くなる。

「この世を自身の世を変えて行きたいと想つてゐるのでありますな。

民の為にこの世を間違つた方向には行かせはしないぞ。」

星もこの状況で感じるものがあるようだ。そつと星の田には  
真剣な光が見える。

「ほり・・趙雲殿もそう思われるか。その思いに感銘を受けた。  
共に闘う仲だ、

我が真名を受け取つてもうこたい。」

「愛紗が預けるなら鈴々も預けるのだ!」

じつやう関羽と鈴々が星と真名を交換するようだ。

「我が名は関羽、字は雲長。真名は愛紗。この真名を預けたい。」

「鈴々は張飛、字は翼徳。真名は鈴々なのだ！」

「我が名は趙雲、字は子龍。真名は星と書つ。我が兄、趙昂の妹。この真名をなた達に預けたい。」

三人とも真名を預け合いこの戦いに更に気合が入つてゐるようだ。

「共にこの乱世を治めよ!」

「「ああー」なのだ!」

三人が手を合わせり、それを見た桃香があわてて手を乗せる。

「あつー烈火さんも早くー!」

桃香が俺も乗せるよつてにせかしてくれる。

「兄上も早く。これから戦う仲なのですぞ?」

みんな良い顔で俺を見て来る。不思議だな・・・」こつ等とこると今からの戦いにも

負ける気がしない。俺は良い仲間に巡り合えたな。

そして俺は手を四人の手の上に乗せた。

「ああ。共に民との平和を。」

「「「「応……」」「」」

「うして五人の絆はまた深い物になった。・・・何か忘れている  
よくな・・・

俺がそんな事を思つていると、隅の方で小さくなつていてる公孫贊  
を見つけた。

「いいんだ・・・どうせ私は昔から影が薄いと言われているんだ・

・

別に忘れられる事なんて慣れているわ・・・」

・

小さくなっている公孫贊が何やら拗ねているようだった。

「すまない。公孫贊！拗ねてないでお前も一緒に頑張ろうなー。なー！」

俺は拗ねている公孫贊を必死に慰めていた。

「拗ねてないもん！！私は拗ねてなんかないんだもん！！」

公孫贊が訳のわからない事を言い出した。

公孫贊が何か言っている内に布陣が決まり、とうとう戦が始まる。

「趙昂！我々は左翼を任せられた。新参者に任せるとは、桃香様が信頼されている証拠。

伯珪殿もなかなか豪快だな！」

「俺達が信頼されている証拠だよ。」

俺はいきなりの左翼でかなり驚いていた。

「世の物よく聞けい！」

公孫贊の演説が響く。

「諸君！ いよいよ出陣の時が来た！ 績度もやつて来る賊共を今日  
こそ殲滅してくれよ！」

公孫贊の声が響く。 兵士たちの士氣も上がっている。

「行くぞ！ 我が勇者達よ！ 明日の平和の為に手柄を立てよ！」

「うおおおおおおお！」

大地を搖るがすよつた声の波、これが軍隊。 俺達の士氣も上が  
て行く。

「出陣だ！ 」

号令と共に、次々と城門から出る兵士達。

こうして俺達の初陣が始まった。

じつもー、いよいよ初陣まできました！

感想お待ちしております！

お久しぶりです！パソコンも無事復活し、恋姫も出来るよくなりました！

でさじつべー

公孫贊の所に密将になつての初めての出陣。現在俺達は敵の賊の砦に進軍中だ。

今から戦だと云つのごとくも締まらない。原因は間違い無くさつきから俺の腕を離さない星だ。

「兄上が居なかつた家はとてもなく寂しかつたですぞー。」

「うういながら俺の腕を絞めつける。こんな事されたら柔らかい感触が伝わつてくる。」

（星は妹だ！意識をするな俺！）

心の中でささやかながら星の話しを聞いていた。

「星ー…そろそろ離れろー…趙昂が困るだらー…こへり妹でも限度があるだー！」

关羽が助けてくれそうだ。いいぞ关羽！そのまま星の意識を逸ら

してくれ。

「なんだ愛紗。そんなにこれが羨ましいのか？久し振りに会ったのだ。甘える位よからう。

ほれ。愛紗も「のよつにした」のであらう？ほれほれ。

そう言つながら更に絞めつける。だから当てるな！

「え？愛紗ちゃん何時趙雲さんと真名を預けたの？」

俺が煩惱という敵との戦をしている時、桃香が聞いてきた。

「はい。先ほどの城を出る時に、星の心に同感して真名を預けました。」

「鈴々も一緒に預けたのだ！」

桃香だけ真名を預けてないのか。あの時一緒にいたよな？聞いてなかつたのか？

「一人ともするい！趙雲さん。私の真名も預かってもらえないで

「 しゃうか？」

「 いいですぞ劉備殿。 我が真名は星。 兄上の旅の共は私の友。 この真名預けたい。 」

「 ありがとうー。私の真名は桃香だよ。星ちゃんよろしくねー！」

これで全員真名を交換し終え。 いよいよ賊の皆に到着した。

「 ここから気合いいれないと。 初めての軍での戦だからな。 我はそう思いながら皆を見つめる。

俺達が来ている事に気付いた賊も戦闘準備に取り掛かっている。

「 これより我が村近辺を脅かす賊共を退治するー。全軍突撃いいいいいー！」

公孫賛の号令と共に兵が突っ込んで行く。 俺達も一斉に突っ込み、敵とぶつかる。

近くにいる敵を容赦なく斬り伏せる我が兵士。 いくら敵でもやはり人が人を斬る事は良く思わない。

そういう思いながらも向かつてきた敵を斬り伏せる俺・・・」の矛盾がどうにもならない。

かなりの数を斬った俺にある異変が起きた。

『どうだ？ 人を斬るのが楽しいだらう？

突然頭の中から聞こえてくる声。 斬るのが楽しいだと？ そんな事思つてなどいない！

『いいや嘘だね。 俺には聞こえてるぜ？ お前が血を望んでいる事を。

『うるさい！ 俺は血なんか望んでいない！ 消えろ！

俺は頭の中から聞こえてくる声に向かつて思いつきり叫んだ。

『ヒヒヒヒ！ 今はそういう事にしこりやる！ また来るぜ相棒！

そういう言い残し、頭の中の声は消えた。

あいつは一体なんだ？俺の事を相棒と言つた。一体何なんだ・・・？

俺が考へていると同時に俺達の軍の勝鬨が木靈した。賊の軍が壊滅したようだ。

こうして俺達の初陣は勝利で飾る事ができた。今は公孫賛の城に向けて帰路をしている。

「やつたね 初めての戦に勝って

桃香が喜んでいる。周囲にいる関羽も鈴々も星も公孫贊も兵のみんなも賊の脅威に

怯えずにいいと思うと自然に顔が緩むようだ。

ただ一人俺だけが険しい表情のままだ。

あの頭の中で語りかけて来た奴は俺の何なんだ・・・?

俺はこんな事を思いながら公孫賛の城に帰つた。

久し振りの投稿で文が変かもしないですが

感想お待ちしています！

初陣からの俺達は、度々ある出陣でも勝利をおさめていた。

関羽や鈴々、星は度重なる戦でその名を有名な物にしていった。

俺はと云つと、最初の戦でのあの声により、多くの敵を相手するのが怖くなつていた。

だが、いへり最低限の戦闘をしてもあの声は戦場になれば必ず聞こえてくる。

それは戦の度に多く俺に語りかけるようになった。

いへり止めると云つても、『血を浴びたいんだろう?』『人を斬る感覺はたまらない物だろ?』

など俺の心を貪るよつに語りかけている。

それでも俺は今まで戦場に出れているのはやはり仲間達がいるからだ。

だが、日々多くなつてゐるこの声でどうどう俺は戦に压されなくなつた。

心配している仲間には風邪をこじらせたと聞いて、あまり心配せぬにようとしたいた。

しばらく休んでいると聞こえて來ていた声も聞こえなくなり、大丈夫な状態になれた。

ちょうどその時、最近各地で暴れているという黄布党の討伐命令が朝廷からくだつた。

「みんな聞いてくれ！わが幽州にも朝廷から黄布党の討伐命が來た。最近の奴らの行動は

目に余る。我々幽州の兵も黄布党討伐の命に従い、黄布党を討とつじやないか！」

軍議の場所で公孫贊が俺達に朝廷から來た文を読み上げ、黄布党討伐に参加するよう呼びかけた。

「うむ。最近の奴らの行動は民を苦しめる悪行ばかり。放つてはおけんな・・・」

「そうだよ！黄布党の人たちは村とかを襲っているって聞いているしね。」

「弱い人達を苦しめる人は鈴々が許さないのだつ！…」

三人はこの討伐にかなり気合いが入つてゐるようだ。

「ではこれよつ一刻後に出発する。各自準備をしていてくれ！」

公孫贊の声と共に軍議は終了し、各自出陣の準備に入った。ただ一人俺だけは不安になつていた。

またあの声が聞こえてこないかの恐怖が頭を駆け巡る。みんなには大丈夫だと言つてゐるので、

俺も武装し、城門まで急いだ。

城門の前にいた俺達は軍をまとめた。

しかし俺には部下はない。精神的に少し崩れた俺に兵が付いていく事はなく、

俺は星の軍に入っている。だが扱いは将としての扱いになつてゐる。

「いれよつ出陣するー全軍前進ー！」

公孫贊の号令と共に進軍しようとしたその時、

「あ、あの、しゅしゅしゅみましょん！」

前方から一人の帽子を被つた女の子が現れた。

「何だ？お前達は？一体何の用だ？我々は今から黄布党の討伐に向かう所だ。邪魔をするな！」

关羽が一人の女の子に向かつて睨みながら追い払おうとしている。一人とも怯えているじやないか。

「あの・・・わたし達も仲間に入れてもられないでじょうか？」

今度はとんがつた帽子を被つた娘が怯えながらも聞いて来る。

「確かに気持ちはありがたい。だが見たところお前達は明らかに武をもつていないうつ？」

「そんな者を仲間に入れても、無駄死にするだけだぞ？」

「関羽がごもつともな返答をよこす。確かにこの娘達は武は期待できないうだろ。」

「はい・・・確かにわたし達は武力はありませんが、水鏡学院で学んだ知力があります。」

「なに？ 水鏡塾だと？ あそこはかなり有名な私塾じゃないか。そこの一人が俺達の仲間に

なりたいと言つてるのは軍師のいない俺達には良い事じゃないか。流石にあの一人ではないと

「思うが・・・」

「すまないが一人の名前を聞いていいか?」

「のままでは話も進まないので俺は一人に名前を聞いた。

「あつ。私の名前は諸葛亮 字は孔明と言いしゅ。あわわ噛んじやいましゅた。また・・」

何?あの伏龍だと女学院の中で一、一を争う者だぞ。

「わたしは名前が鳳統で、字が士元といいましゅ。あわわ・・・

「うちは鳳雛だつて?女学院の最高の実力者が一人とも俺達の仲間になるなんてそんな事は

夢みたいだ。

ぜひともこの一人は軍師として働いて貰いたい。

「では諸葛亮殿と鳳統殿、何故我々の軍に入りたいのだ?」

关羽が皆を代表して一人に聞いている。

「はっはいっ！わたし達は水鏡先生の所で多くの勉強をしていました。でも今、この国は腐敗していて民が苦しみ、何も出来ない人達が多く出ています。」

「その時、わたし達の思いと劉備さんの思いが一緒だと知り、わたし達は水鏡学院を飛び出してきました。」

「この二人は桃香の目指すものが一緒なんだな。そしてこの真っ直ぐな目、

そんな目をしている者を拒む事は出来ない。

「どうじょうか？烈火さん？」

桃香が俺に聞いて来る。桃香の顔を見ると桃香も答えが決まっているみたいだな。

皆の顔も見ると同じみたいだ。決まりだな。

「諸葛亮と鳳統、俺達は君達を歓迎するよ。」

俺は一人に言った。

「やつたね雛里ちゃん…」

「そうだね朱里ちゃん。」

一人は手を取り合ひ喜んでいるようだ。

「私の真名は朱里と言います。よろしくお願ひしましゅつ。あわ  
わ・・」

「私の真名は雛里でしゅ。あわわ・・」

よく噛む一人だなと思いながら俺はほのぼのとしていた。

ひつして軍師が一人仲間となつた。

感想お待ちしております

お久しぶりです！

でねどりうわー！

俺達の軍に朱里と雛里の二人の軍師が加わり、黄布党の討伐へ向けて進軍中だ。

軍師の二人が真名を預けた時、俺達全員の真名も預けた。

「なあ朱里。黄布党の討伐だが何か策はあるのか？」

いくら軍師が加わったとはいえ、策の一つも考えていないなら話にならない。

俺は一人の策がどれほどの物か試したくなり、これから討伐の策を聞いた。

「はい！あと四里ほどいったら昔、川が干上がつて出来た大きな谷があります。

そこに先行して出た愛紗さんの部隊が敵に追いつかれず、離さずの距離を保ちながら、

この谷まで引きつけてもらいます。そこで谷の両脇に構えてい

る、星さんと公孫贊さんの

部隊が『を放ちます。そして逃げようと後退する敵を岩陰に潜んでいた鈴々ちゃんの部隊が

出てきて、愛紗さんの部隊と挟み撃ちにして敵を殲滅します。

ほほう。この短時間でこれほどの策が思いつくとは流石だな。俺は素直に感心していた。

ん？ ちょっと待て。この策には俺は『部隊か。まあ殺す事には変わりないが、

自分自身の武器で斬るよりはましだと思つていた。

「あつ！ 烈火さんには今から単騎で敵の情報は集めて欲しいと思つています。」

俺が、弱気な事を思つていると、横から離里が俺に単騎で敵の情報を集めて欲しいと言い出した。

「何故、単騎で行くんだ？ 情報収集ならもつと大人数で行けばいいじゃないか。」

俺はこの案に何故か納得できていなかつた。それ故に、少し声を張り上げて、言つてしまい、

一人をすこし怯えさせてしまつた。

「はい・・今からする策はあまり人を削りたくないんです。仮に大人数で行つても、

敵に見つかつてしまつたら元もこつもありません。さらに、自由に動けて、

武も長けている人は烈火さんしかいませんでした。」

なるほど、この策には俺の思つてゐる事が全て駄目なのか。納得といった。

「さつき星さんから聞きましたが烈火さんは精神的な病から最近復帰したらしいので、

あえて戦闘要員としては、数に入れていません。」

「それなら仕方ない。なら俺は黄布党の事を調べてくるよ。」

俺はそう言い。単騎で行動に移つた。

黄布党の事を探りに行く為、俺は単騎で行動していた。

ある程度行くと向やうじむけに向かつて来る集団がいる。

田を凝らし良く見ると、全員身体の一部に黄色の布を巻いた。

それは間違ひ無く黄布党だつた。しかしこいつ等が向かつて行く所は桃香達が進んでいる

方向とは違う所だつた。このままではマズイ。この集団が桃香達とぶつからないと、

朱里と雛里の策は失敗に終わる・・・

俺はこの事を皆に知らせようと走り出をつとした時、

「おいーそこの男ーここで何をしてる?」

見つかった！

俺は黄布党に見つかつてしまい、あつとこいつ間に囲まれてしまつた。

「おい！兄ちゃん。ここで何してんだ？まさかどこの軍じゃないだろ？」

集団の先頭にいた男が俺に聞いて来る。

「だつたらどうする？」

俺は少し威嚇しながら男に答える。

「くつ・・・！簡単な事よ。そつだつたらこの場で死んでもうれ。今俺の後ろに居るのは

三万の会員だ。それと各方向にも最低二万の会員が近くの村を皿指して出発している。

「どうしたってお前は殺すがな！」

桃香達が進んでいる所にも奴らは向かっているのか。早く知らせないといけないな。

だがどうしても戦いは避けられそうにない・・・どうしたものか・

「どうした？あまりの数にビビったか？だがお前に用はないわつさと死ね！」

そう言い先頭にいた男は俺に向かって剣を振りおろしてきた。

俺はそれを避け、斬りかかって来た男の首を跳ね飛ばした。

しばらく出てこなかつたあの声だまだ出てこないだらつ。俺はそう思い更に近くにいた五人の

胴を半分にする。

一瞬何が起こつたか解らない黄布党はしばらく呆けていたが直ぐに正気を取り戻し俺に向かってきた。

飛び散る首や手足、そこから出て来る血の雨、所詮は賊の集まり、鳥合の衆。

五千位は斬つたはずだ。だが減るよつた感じは全くない。どうもなく思つていたその時。

『ヒヒヒ、久し振りだな相棒。

聞きたく無い声が聞こえた。

『やつぱり斬る事は楽しいだろ？俺もお前越しに呑わつて来るんだぜ！

「うわわーーー消えろーーー」

俺は心の中に叫んだ。

『くくく。それは無理だな。

じつこいつことだ？ 僕はそつちに気が逸れてしまい、迫つて来る斬撃に反応が遅れてしまい、

顔を斬られてしまった。

顔から血が噴き出す。それで出来た隙に敵が一斉に斬りかかって来る。

どれだけ斬られたか解らないがかなりの血を失っている。

『大丈夫か？相棒。まあこの数にここまで出来た事は大したものだ。お前はまだ弱い。

俺が戦いはどんな物で、お前の本能が望んでいる本物の殺しを教えてやる。』

やつ中の声が言つと同時に、僕の意識は自分の意思とは関係なく、

自分の中に入つて行くような感じがした。



おやくなじました。

なんか文が変になっていますが、

感想お待ちしています！

## 29話（前書き）

前の話が中途半端になつてすみませんでした。

睡魔には勝てない物です・・・

でわざわざ

～side 黄布党～

俺達は近辺の村まで食糧を調達をしに、約三万で向かつた。

張角様達がお腹を空かせては、あの歌も聞けなくなるからな。

村に向かつてしばらく進むとそこには一人の男がいた。

先頭の会員がそいつに斬りかかるといつしたら、周辺にいた同志もうとも首が飛んでいた。

そしてその男との戦闘が始まつたのだが、いつこうに打ち取つた  
といつ話は無い。

むしろ、同志の首ばかりが飛んでいる。

飛び交う肉片、舞い散る血液。次々と同志の屍が積み上げられて  
行く。

五千ほどの同志が肉片と化した時、男の動きが急に止まつた。

その隙を逃すまいと次々と男に斬り掛けに行く。

かなりの出血量だが倒れる気配が無い。一人の同志が男に斬りかかるうとしたと同時に、

同志の首が飛んだ。男の様子がおかしい。

「ヒヤーッハッハッハ！出れた、出れたぞ！これで人を斬れる！お前達・・

良い鳴き声を聞かせてくれよ！」

男がこの言葉を言つたと同時にそこには多くの同志達が血を撒きながら宙に舞つていた。

『お前の本能が望んでいる本物の殺しを教えてやろ。』

声がそんな事を言つたと同時に意識が引きずり込まれた。

意識ははつきりとしている。見えていの風景も一緒だ。ただ一つ違つのは、

身体が思い通りに動かない事だ。まるで別の何かが俺を動かしているような感覚だ。

その時、一人の黄布党が俺に斬りかかって来た。避けよつと思つが全く身体が反応しない。

相手の剣が振り下ろされよつとした時、その黄布党の男の首が跳ね上がつた。

そう俺が斬つたのだ。自分の意識に反して・・・

「ヒヤーッハッハッハ！出れた、出れたぞ！これで人を斬れる！  
お前達・・・

良い鳴き声を聞かせてくれよー！」

【俺】 から発せられた言葉。その言葉を言つた直後に動き出す身体。

真っ先に黄布党に向かって行く。そして残虐な殺戮が始まった。

「クツクツク・・やはり人を斬る感触は快感だ。」

そう言いながら次々と黄布党を斬つていく身体。間違いない。今俺の身体を支配しているのは

あの声なのだと。

もうやめろ・・・やめてくれ・・・

いくら思つても一向に止まらず、人を斬つていく身体。

相手がいくら命乞いをしたり、逃げようとしても容赦なく命を奪つて行く。

まるで殺す事に喜びを感じているように斬っていく。

これが俺の本能・・・殺す事に喜びを見出す獣・・・俺は自分自身に吐き気がした。

それから身体が止まつたのは黄布党の者達が全て屍になつた時だつた。

三万の相手をたつた一人で壊滅するほどの武力を誇つた俺の身体。

「まだだ・・・まだ血が足りない・・・もつと!もつと人を斬らせろ!-!」

あれほどの人を斬り殺しても足りないと呟つもつ一つの俺の意識。

黄布党の者達の血液が土にしみ込んで行く時に物陰から覗いていた人物が現れた。

「あつらーお久しぶりね趙昂ちゃん。いえ・・・今は中の趙昂ちゃんかしら?」

貂蟬が物陰から出て来たのだ。

また文が変だ・・・

感想おまちしこきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2175m/>

---

恋姫物語

2010年10月9日01時44分発行